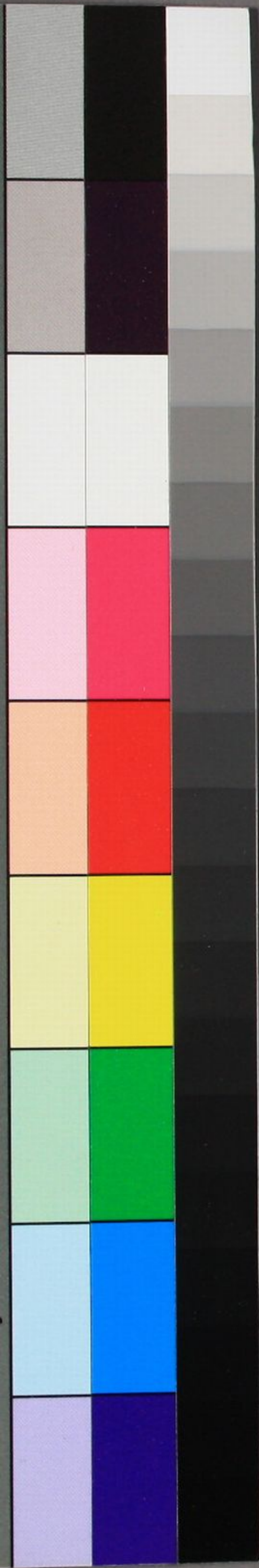
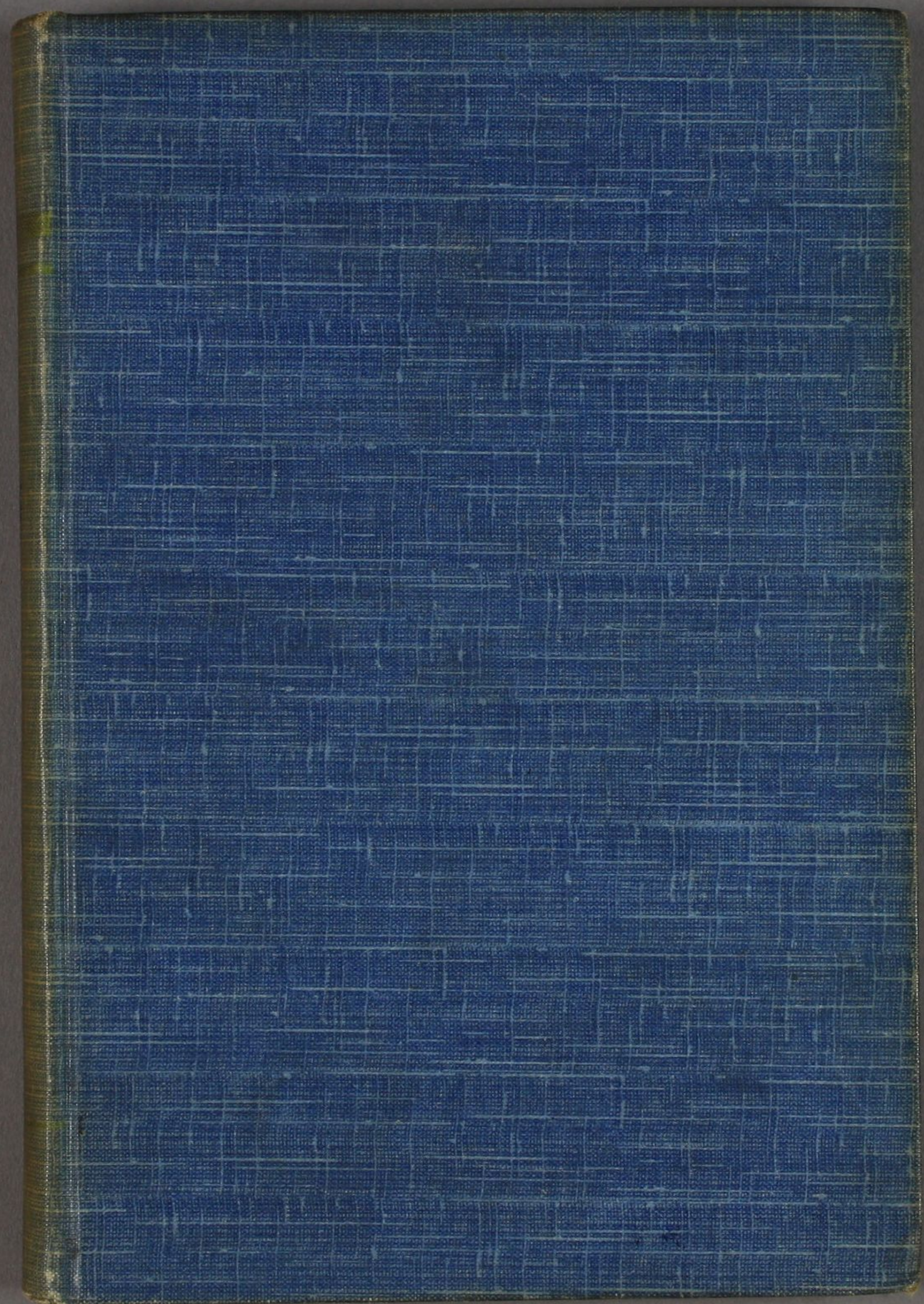
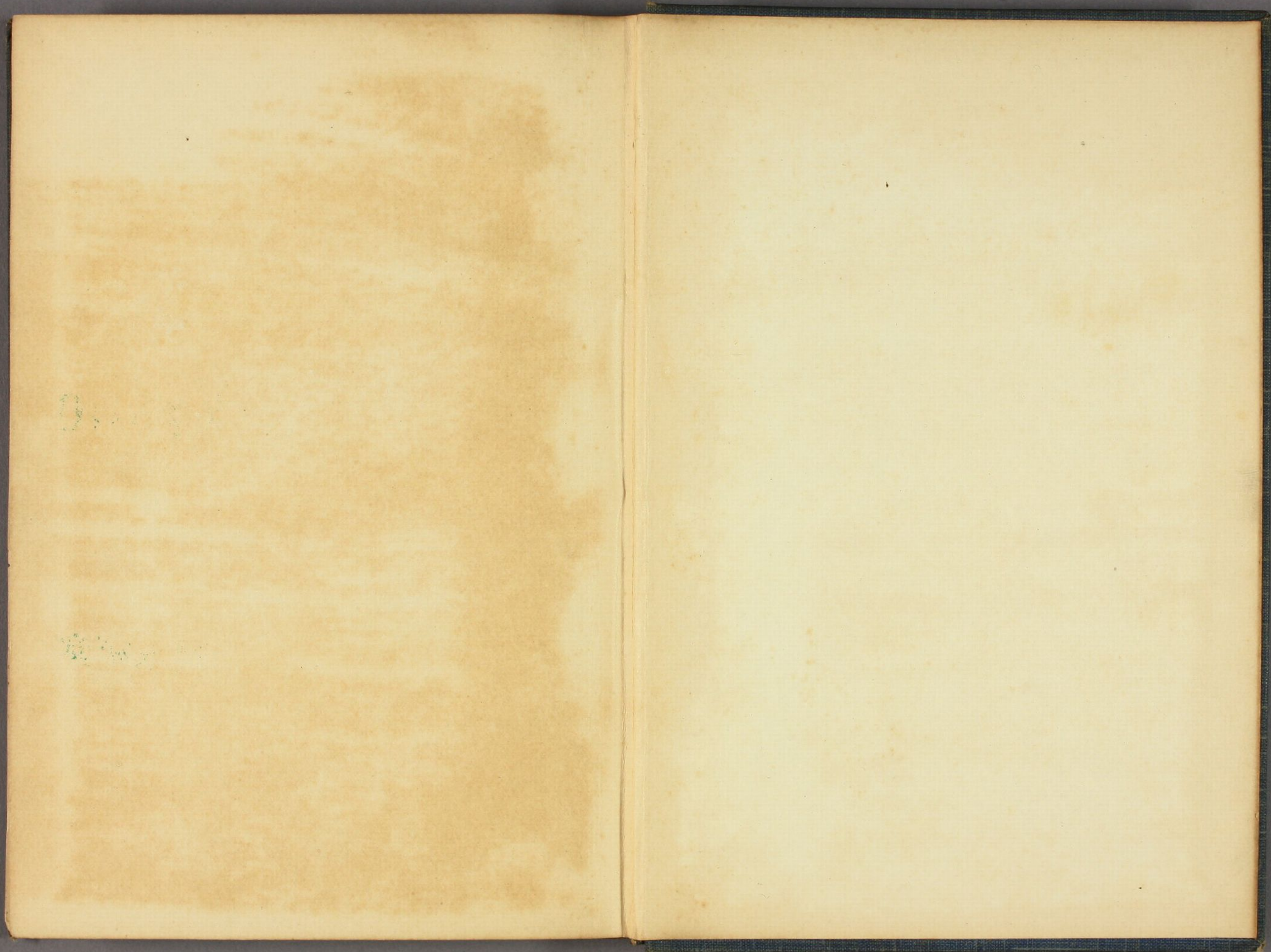


入江花錦著
斷腸



斷
腸





斷

腸

寥圃庵主花錦著

譬へば火中に投げらる
る白百合の花——懐し
き笑まひ涙らしつつ面
隠らひまして昔着き石
砌の下に……おはせる
温泉の君の慰前に捧ぐ

Tears came into his eyes; and as slowly he lifted his eyelids,
Vanished the vision away, But Evangeline knelt by his bedside.
Vainly he strove to whisper her name, for the accents unuttered
Died on his lips, and their motion revealed what his tongue would
have spoken.

Vainly he strove to rise; and Evangeline, kneeling beside him,
Kissed his dying lips, and laid his head on her bosom.

Sweet was the light of his eyes; but it suddenly sank into
darkness,

As when a lamp is blown out by a gust of wind at a casement.

All was ended now, the hope, and the fear, and the sorrow,

All the aching of heart, the restless, unsatisfied longing

All the dull, deep pain, and constant anguish of Patience!

And, as she Pressed once more the lifeless head to her bosom,

Meekly she bowed her own, and murmured, "Father, I thank
thee!"

—Evangeline—

The past a blank, the future black.

Her life began and closed in woe!

序
詩

しかく映 <small>は</small> 美 <small>よ</small> さ	薔薇 <small>しやうび</small> さ <small>く</small> やく	ゆかし <small>さ</small> 戀 <small>こひ</small> の	笑 <small>わら</small> ま <small>ひ</small> 漏 <small>も</small> ら <small>し</small> て	やさし <small>き</small> 菫 <small>すみれ</small> は	星 <small>ほし</small> の影 <small>かげ</small>
園 <small>その</small> の中 <small>うち</small>	花 <small>はな</small> の園 <small>その</small>	物語 <small>ものがたり</small> に	打 <small>うち</small> ち <small>あ</small> げ <small>ぎ</small>		

Still stands the forest Primeval; but under the shade of its
branches

Dwells another race, with other customs and language.

Only along the shore of the mournful and misty Atlantic

Linger a few Acadian Peasants, whose fathers from exile

Wandered back to their native land to die in its bosom.

In the fisherman's cot the wheel and the loom are still busy;

Maidens still wear their Norman caps and their kirtles of
homespun,

And by the evening fire repeat Evangeline's story,

While from its rocky caverns the deep-voiced neighboring ocean

Speaks, and in accents disconsolate answers the wail of the forest.

—Evangeline—

胡蝶を友に 香を慕ひて
睦れんの君 爾が希望
求めなましそ 此の篇に。

詩に貧しき 胸の絃

悲哀の曲に 高鳴るを

香なく調べし 詩の篇

涙の淵よ——血の泉

浮ばじ 優しき 星の笑

映えじ 美しき 花の彩

聞えじ 懐しき 鳥の樂

響かじ 靈しき 水の韻

さはれ 終日 終夜

悶えや 熱き 牀の上

泪かなしく 世の人に

捧げん爲の 詩の篇

希望の福音 あらずとも

快樂に飢うる 胸の邊に

慰藉の甘露 願ち得ば

充たざらんやは 余が願

落葉の影にて

寥圃庵主

花錦生

しるす

篇中、裏に出版せし界著

「忍ぶ草集」「不如歸集」中の句を、際更に、多少改作して用ひたる所あり。これ強ちに心なきわざならず。翼は見人御高際を垂れたまはれかし。

詩中の人物

清河 玄美、品子

鳴海伍左衛門、操子

浦見 嚴、幸枝子

緒方 秋子 以上

前編

目次

序詩の巻……………一

第一章

管絃の巻……………七

第二章

花蔭の巻……………二三

第三章

月影の巻……………四一

第四章

遺書の巻……………五七

第五章

此の稚子未だまなくはぐくみ終へたりとはは
あらねど、想ふ所ありて疾くより旅立たしむ
ることとはなしぬ。

幸は、迎へられん人の馳り先導を蒙らば、余
が胸和がなかな。——三十八年十一月廿五日——

誓詞の卷……………七五

第六章

寄宿の卷……………八一

第七章

雪華の卷……………九一

中編

(上)

第一章

家郷の卷……………一〇七

第二章

卯花の卷……………一二二

第三章

沈黙の卷……………一二〇

(下)

第四章

青山の卷……………一三六

第五章

暗雲の卷……………一四五

第六章

湖畔の卷……………一五五

後編

(上)

第一章

富浦の卷……………一六三

斷腸

序詩の卷

(一)

此處は寂びたる 塋の場
 老の松が枝 苔あをく
 銀杏は 空に 聳え立ち

入江花錦著

第二章	巖頭の卷	一七六
第三章	孤燈の卷	一九九
第四章	斷腸の卷	二一五
(下)		
第五章	草廬の卷	二三〇
第六章	墓前の卷	二四三
	目次終	

寂寥さびしみ ふかき 常秋とこあきや。

此處こゝは 寂びたる 瑩ほかの場ば

夕暮ゆふぐれ 法者はふさが 人生ひとのよの

未ゆく來すへ占うらなふ 悲哀かなしみの

聲こゑか の 如ごとき 韻ひびみつ。

悶もたえ 悶もたえて ともすれば

狂くるひが ちなる 都まちの子こが

深山みやまに 奏かなづる 「斷腸たんちやう」の

曲まがか 不斷ふたんの 風かぜの 韻おと。

(三)

此處こゝに 冷ひえたる 碑いしの 面おも

永劫とこはの 静寂しじまに 默もたしつゝ

刻ときみし 文字もじは 薄うするれど

怨うらみ 泪なみだの 跡あとぞ 濃こき。

此處こゝに 冷ひえたる 碑いしの 面おも

沈黙しんもくや ぶれて 月つきの 影かげ

身みに沁しむ窓まどに
永眠ねいみんりたる
處ところ女の影かげを
語かたれるに――

小鳥せうとりが馴なれたる飼主かひぬしの
指ゆびに餌えを啣くはむ姿さまの如ごとく
血ち汐しほぞ揺ゆるる胸むね抱いだき
詣まよでし若人わかひと！
今いま奈邊なへ。

(三)

あゝをやみなき

人生ひとの上の

潮うしほなゝたび
環めぐりぬ！
咽せせぶ韻ひんは
絶たえなくに――
さはれ吹ふく風かぜの

覺さとらぬ君きみを
想おもひの小草せうそう
根ねを深ふかみ
抜ぬきえぬ怨うらみ
人ひと知しれず
人々ひと々よ
憐あはれむ人々ひと々よ

聽ききませ！
碑いしにひれ伏ふして

前編

第一章

管絃の巻

(一)

北きたにに岨そぼ峯やま西にしにに丘かみ
 南みなみにに東ひがしにに廣ひろき圃はた
 假か装そうのの外み見みをを外よそににして
 此こ處こやや平なご和みのの鄙ひなのの郷さと

運さた命めをを捧さげ世よをを捨すてし
 若わか人うど「ひろ玄み美み」をを悲かなししみみて
 松まつがが枝え調しらぶぶるる哀あいのの詩うた！

高たか古こ伏ふせ
 き色しよく屋やの
 家かささの
 屋おくびび簇むれ
 ははたたる
 此こ北きた
 の池いけの
 郷さとの方かた
 の傍へに

(三)

名な伏ふせ右みぎ是これ
 づ家やにに臨のぞ
 けての簇むれ左ひだりみ
 字あざのにて
 を
 數すう茅かや丘をか
 谷たに十じゆ茸ぶいの
 の戸この麓もと
 市いち

西にし浮うか秋あき春はる
 ゆぶはは
 る
 東ひがし小こ緋ひ
 に妙たへ萩はぎ桃もも
 ののの
 流ながさ花はな花はな
 れなゝのの
 ゆな流なが彩あや艶いろ
 く

此こ文ぶん朝あさ眞ま
 處こ化くわ日ひ金かね
 やの郡ごほり吹ふ
 榮はのく
 安い光えを西にしふ
 息こゝろの
 の外よそ極はて吉き
 鄙ひなにし備び
 のしての國くに
 郷さとて

此の村落の	東の方の一軒は	是れに隔てる	高き家屋ぞ	池の彼方に	帯かの如く	牧場に通ふ	狭き徑	榮を翳せる	學園の舎
	庄屋様	一二町		寄宿の舎	聳え立つ	環らせる			

吾が子の如に	主人の鳴海は	村民を	慈愛し	四時薫れる	名に負ふ草木	花の園	倭國漢土	はたと西の國	家の背面は	いと廣く	主人は	鳴海伍左衛門

(三)

寶たからをさへも 投げうちて
村落さとの公益こういには 盡つくしけり。

されば 恰あたかも 双ふた婢ひの如ごと
郷人むらびといたく 慕したひ 寄り
名譽なまねも 幸さいちも 集つどふなる。
渠かが 肩身かたみに 集つどふなる。

仁慈めぐみに厚あつき
伍左衛門ござゑもん

(四)

鄙ひなには稀まれの 雅男みやびをよ
詩歌しうかの道みちを たしなみて
俳句はいくをこよなく 好このみけり。

手てには 鋤すき 鋤く
玉たまなす 汗あせを 流ながしつゝ
日ひ毎ごといそしむ 農夫たかやしを
集つどへて 開ひらく 詩うたの 宴あひら

農夫等たかやしをらが 熱心ひたすらに

畫筆は絶たん圃の中
鋏とる間にものしたる
俳句を聞きて樂しみつ。

腰折ながら己が身の
ものせし詩を高聲に
謠ひて漏す顔の笑
見ては畏む農夫。

(五)

しかく睦の詩の宴
内に交はる中學は
優しき性質の青年にて
その名を清河玄美とぞ。

俳諧連歌和歌
漢詩さては長詩に
渠が詩才あらはれて
名聲の聞え高かりき。

斯かれば 鳴なる海み伍こ左さ衛ゑ門もん
 玄ひろ美みをい たく 愛うつくしみ
 詩うたの會あひ毎ごとに 招まねき來きて
 ミ ユー | ズ の 如ごとく 待も遇てしぬ。

(六)

清きよ河かは玄ひろ美みと 聞きこゆるは
 此この村むら落おちゆ 北きたの方かた
 「永なが成なりと 呼よべる 孤こ村そんの兒ち
 此こ村むらに 學まなびの 草くさ枕まくら

寄やど宿りにありて 學がの海うみ
 文ふ學みの林はやしを 辿たどりつゝ
 學まな才さいや 級ぐらの 友とも垣かきに
 秀ひしで、常つねに 級ぐみ長がしら
 幼ちひ少なより 海かい軍ぐんの
 軍いくさ人びとたち 眺ながめや
 此この身みもが 健けん氣けにも
 希のぞ望みの影かげを 抱いたきけり。

さるを如何なる
 故ならん
 性質か
 學の
 爲か
 さも
 渠はあやなく
 眼病みして
 近眼とこそは
 なりにけれ。

或日醫師に
 しか事情を
 聞ききたる
 渠や
 暫時は
 痛嘆の内
 に送りしが
 何故か
 厭はん
 學の海

心に勉勵の
 鞭を打て
 文學の華さ
 く
 林の邊
 詩の泉を
 求めんと
 立ちにける。
 深くぞ想ひ

(七)

玄美は疾く
 ゆ管絃の
 妙なる調
 研究めんの
 希望の錨
 かたくして

「時機」をのみぞ 待ちあたる。

時しも 詩の會に よりて

鳴海の宅に 足繁く

通ふ程なく 鍵を得て

「時機」の門を 開きたり。

鳴海が いたく 愛しむ

その娘 操子と 宵々に

管絃 活花 はた 點茶

學ぶ事とは なりにけり。

(八)

二人は 疾くも 節進み

段を重ね つ 術たけつ、

渠等が 奏づる 調には

澄みて 響くよ 神の樂。

譬へば 天の 樂堂に

靈琴列ぬる 女男の星

操子やあはれ
宵明星よ
玄美やあはれ
曙の星

しかくすさびの 日々に
渠等二人の 親交は
いとどけ厚く なりゆきて
恰も眞實の 兄と妹

玄美が 敬愛の 言の葉に
語り出づれば 操子女は

「隔て心の おはすよ」と
疎遠 寂焉 想ふ迄に

第二章

花陰の巻

(一)

か	黙 <small>もた</small>	彼 <small>か</small>	二 <small>た</small>	何 <small>い</small>	風 <small>な</small>	眠 <small>ねむり</small>	心 <small>こころ</small>
す	し	の	人 <small>たり</small>	處 <small>こ</small>	ぎ	の	形 <small>がた</small>
む	て	も	は	さ	て	領 <small>ちやう</small>	な
櫻 <small>さくら</small>	竟 <small>つひ</small>	此 <small>こ</small>	樂 <small>たの</small>	ま	静 <small>しづ</small>	に	す
の	に	の	し	よ	け	入 <small>い</small>	池 <small>いけ</small>
花 <small>はな</small>	佇 <small>たす</small>	も	く	ふ	く	れる	の
の	み	に	庭 <small>には</small>	?		る	面 <small>おも</small>
蔭 <small>かげ</small>	ぬ	庭 <small>には</small>	の	波 <small>なみ</small>	真 <small>ま</small>	め	
	傳 <small>つた</small>	石 <small>いし</small>	の	の	澄 <small>かど</small>	り	
	ひ	つ	の	夢 <small>ゆめ</small>	鏡 <small>かみ</small>		
	つ	ゝ					

あ	薰 <small>かほり</small>	お	花 <small>はな</small>	伴 <small>つ</small>	共 <small>とも</small>	玄 <small>ひろ</small>	琴 <small>こと</small>
ゝ	の	ぼ	爛 <small>らん</small>	れ	に	美 <small>み</small>	の
艶 <small>えん</small>	中 <small>うち</small>	ろ	燭 <small>もく</small>	立 <small>た</small>	携 <small>たづ</small>	調 <small>しらべ</small>	
なり	に	に	の	ち	へ	操 <small>みさ</small>	の
や	霞 <small>かす</small>	庭 <small>そ</small>	庭 <small>そ</small>	出 <small>い</small>	子 <small>こ</small>	は	終 <small>ま</small>
夕 <small>ゆふ</small>	灰 <small>ほ</small>	園 <small>の</small>	園 <small>の</small>	で	お	も	へ
の	め	中 <small>うち</small>	中 <small>うち</small>	ぬ	も	む	しま
姿 <small>さま</small>	き	の	の	庭 <small>そ</small>	ろ	る	ゝ
	て	影 <small>かげ</small>	影 <small>かげ</small>	園 <small>の</small>	に	に	手 <small>て</small>
				の	を	を	
				中 <small>うち</small>			

神かみの靈たま鏡かがみに映うつすとも
 曇くもりやあらぬ 聖きよき愛あい
 胸むねに懐いたける 此この身み等らの
 夫それにも似にたる 今いま宵よひ哉かな』
 傍かたはら近く 坐まを占しめて
 同おなじ眺ながめに 悲かなしげに
 笑わらまへる 操みさ子こ 應こたへけり
 常つねに似にげなく

玄ひろ美み 近あたり 邊へを 眺ながめつゝ
 理り想さうの園そのに 入いりし如ごとく
 快け樂らくの 色いろを 顔おもの上うに 言いひけらく
 湛たへながらに 顔おもの上うに 言いひけらく
 『あゝ 艶えんなりや 春はるの夕ゆふ』
 花はなは漏もらせり 愛あいの笑わら
 おほるに月つきも 匂におへるよ
 天あめ地つちなべて 美びの装よそひ
 美びの装よそひ

「げにや 妙なる 景色かな！
 さはれ 何時しか 移らひて
 花の名残は 春雨の
 もの 儚なきを 如何にせん。

しかく 互にいと熱く
 聖き想を 通はせて
 固く心に 懐くとも
 御身は… 遠き旅の君

學を終へて 家郷に
 歸りましなば 水泡や
 消えて跡なき 夕の空
 仰ぐ此の身ぞ 忍ぶ草

共に學びし 琴の曲
 妾やひとり 奏でつゝ
 絃は断たんの 夕來ずや
 想へば沈む 妾が心！』

「何をか嬢よ
宣はす？
悲しき胸を
閉ぢましね、
聖き心の
何時しかも
移らふべきの
事あらん。

いかに遙けく
山と川
雲はた水を
隔つとも
互に懐く
眞心や
何どか隔ての
有らんやは。

處女心の
御身こそ
しかは思さめ
如何なれば
此の身に無情
胸あらん、
な宣ひそ
憂き事を。

いと闊活き
性質にます
御身宣ふ
言葉とも
想はれぬ哉
うとましや
斯くと
玄美は
慰めつ。

語りたげなる顔にして
 彼女を視し時よ、
 薔薇色美しき頬の上
 さと紅の流れけり。
 少時ためらひ俯向きて
 黙しゐたるがさる程に
 渠の手を把り言ひ出でき、

(三)

「玄美の君よ 妾は…。」
 再びためらひ言ひ淀み
 池の面を眺めいる
 操子の姿や盆栽の花
 匂ひは高き薔薇の花。
 玄美が彼女を愛しき手を
 固く握りて何となく

(四)

心こころ足たりせぬ 言ことの葉はを
漏もらすにつれて 語かたるらく。

「玄美ひろみの君きみよ あゝ君きみよ

學問まなびにすぐれ み心こころの

優やさしくおはす 君きみと爾しか

語かたり得うるこそ 嬉うれしけれ。

よすがと頼たのむ 生母うみのは—

兄弟はらからだにも 有あらずして

想おもひ 寂さびしき 籠かごの鳥とり
それにも劣せとる 妾わらわの身み。

いかに 千萬ちよろず 山やまと川かは

雲くもはた 水みづを 隔へたつとも

心こころの空そらに 隔へたてなく

妾わらわを愛いしみ 賜たまはりね。

飛鳥あすかの淵ぶち瀬せ 常つねなくも
富士ふじの高根たかの 動うごきなう

心に深く胸に秘め
よすがと頼ぐは御身のみ。

玄美の君よ あゝ君よ
恥しかれど 數ならぬ
妾が「兄君」と なりまして
愛で給はじや 永久に！」

(五)

玄美は やをら 應答へける

「いかでか 嬢よ 御身のみ
寂しき庭の 人ならん
悲しき窓の 人ならん。

三日は 永き 花の 艶
脆きは 何れ 世の 姿
詩人の胸に 絶えまなく
響けるとかよ 哀の曲。

さはれ 静かに 思されよ

落つる木の葉の音さへも
心樂しき音樂者の響くとよ。

心樂しくおはしなば
眼には映らん希望の火
耳には響かん幸福の韻
| 人の世に

悪口性の人の世に

兄よ妹よと誓ひなば
風聞やつらく語りあふ
夫れだに辛くなりゆかん。

疑ひ誤解の雲深く
貪慾嫉妬にともすれば
狂ひ勝なる世の状態を
心しましね思されよ。

まいて親しく胸と胸

包つ隠つむ限くまなく明あかしあひ
謠うたひつ笑えみつ睦むつるゝを
なさずもがなよ「誓ちかひなど」

(六)

折をりから玄ひろ美みは立たち起あり
想おもひに沈しづめる操みさ子この脊せ
軽かるく打うちけり「永とこし久へに
聖きよく社ことぞ低さ語ごきて。

操みさ子こもやをら立たち起あり
「松まつの常とこ磐はの變かはりなく
御おん身みの愛あいのみに手てに！」とて
玄ひろ美みの腕うでに縋すがりけり。

第三章

月影の卷

愈いよよあつしく なりゆきぬ。
 初はつめの程ほどは 月つきの夕ゆふ
 玄ひみ美みと共ともに 琴ことに倚より
 同おなじ調しらべを 奏かなでつゝ
 漏もらしたりしよ 頬ほの笑あはみ
 或あるは 涼すずしき 夕ゆふまぐれ
 清しみ水みづ流ながるゝ さ 川がはの
 岸きし邊べに出いでゝ 往ゆく水みづに

何い時ときしか 月つき日ひ過すぎゆきて
 吹ふき來くる風かぜの うら寒さむく
 下したの界かいの衣ころも 金こん色じきに
 移うつり變かはりし 秋あきの晚くれ
 文ふみ月づき頃ころゆ かりそめの
 病やまひの床とこに 起おき臥よして
 惱なやみ居ゐたりし 操みさ子こ女ぢよは

(一)

流^{なが}したりしよ
胸^{むね}の雲^{くも}。

さ^すはれ
涼^{すず}しさ
増^ますにつれ

頭^{かしら}は重^{おも}く
胸^{むね}晴^はれず

人^{ひと}に顔^{かほ}容^{けい}
見^みられんも

可^う厭^うくこそは
なりにけれ。

薔^ば薇^いにも優^{まさ}る
顔^{かほ}の艶^{いづ}

漸^{した}次^いに
蒼^{あそ}白^{しろ}く

みど^みり
月^{つき}の眉^{まゆ}

匂^{にお}へる
月^{つき}の眉^{まゆ}

愁^{うれ}ひの雲^{くも}に
鎖^{とぎ}されぬ。

優^{やさ}しさ映^はえし
晴^{ひと}眸^みには

涙^{なみだ}の影^{かげ}の
仄^ほめきて

玄^{ひろ}美^みに會^あふだ
何^{なに}となく

羞^{はぢ}はしげに
装^{よそ}ふなる。

(三)

今^{いま}はた病^{びょう}の
牀^{とこ}の上^{うへ}
臥^ふしたるまゝに
十日^{じゅうにち}まり

食物をも食はず
唯だ獨
寂しく沈黙の
憂き姿

譬へば 晩れゆく
春の夕
雨になやめる
海棠の
色香やうく
移らひて
散るをし待てる
風情哉

あゝ死の影は！
頃日
操子の上へ
寄せぬ 映りぬ

あゝ「薄命」の
憂き頁
捲かんの光景よ
彼女の身

(三)

黄金の光 冷やけく
名残惜しげに 西の空
耀き過ぎる 夕まぐれ
玄美 彼女を見舞ひたり。

南向きなる
窓の下

操子みさこは白しろき褥しとねの上うへ
眞ま白しろの衾よぎににつゝまれて
辛からく微まど睡み居みたりける。

桔梗ききやう一本もと枕邊まくらべに
床とこには秋あきの七草ななくさを
いと花車はなぐるまに活いけなして
點茶てんちやの調度てうど位置ちぞよき。

醒めめしめんも本意ほんいなしと

玄美ひろみがしばし顔おもての姿さま
看視まもり居をれば夢ゆめみけん
佗わびしく浮うかべぬ笑えみの浪なみ

肌はたえに響ひびくうら寒さむき
野の分わけの風かぜはさと暴あれて
櫻さくらの枯葉かれは散ちりまがひ
寂寥さびしふかし室へやの中うち

(四)

操子 醒めて 苦しげに
玄美の姿 眺めつゝ
羞はしげに 面そむけ
黙して 再び 目を閉ぢつ。

時しも 醫師 入り來り
やをら 診察 出でゆきて
家内 親族の 人々は
傍近く 寄り纏ふ。

夕の幕 垂れ込めて
かほそく 淡き 燈灯に
彼女の顔や もの 凄く
死の色 かくや? と 想はれし。

(五)

操子は またも 眼を開き
乳母まぢかく 呼び寄せて
いとど 微かに 震へたる
聲して 何をか 語る時。

乳母の静かに
 手號して
 何れにも
 室の邊に
 避けましねとぞ
 請ひ出でき。

斯くて程なく
 諸人は
 彼女の室にかへりしが
 操子の晴眸！
 映りあひたる
 其の時よ。

あゝその時よ
 その瞬間よ
 蕾ながらに
 うら若き
 處女は！
 あはれ
 操子女は！
 下界の息を
 絶ちけり。

玄美の顔を
 眺め入り
 色蒼褪めし
 唇に
 寂しくいと
 冷やけき
 笑を浮べし
 儘にして。

窓^{まど}さ、悲^{かな}しく
 洩^もと、揺^ゆれたる
 風^{かぜ}にたりし
 燈^{とう}火^しの
 眼^めの光^{ひかり}

(六)

聲^{こゑ}あ、夢^{ゆめ}よ、靈^{たま}よ
 も、たりの、常^{とこ}磐^{いわ}
 通^{かよ}はぬ、堅^{かき}磐^{いわ}に
 姿^{すがた}に、安^{やす}か、清^{きよ}け
 祈^{いの}り、た、か、れ
 して、る、と、れ

天^{あめ}の宮^{みや}殿^{どの}に
 轉^{まわ}り絶^たえし
 魂^{たま}ぬけ、逝^ゆく、愛^{あい}し
 の如^{ごと}く、昇^{のぼ}り、籠^{かご}の
 内^{うち}の小^こ鳥^{どり}の
 名^な残^{ごり}の色^{いろ}は、
 あえ、か、の、口^{くち}に、
 永^{とこ}劫^はの、熟^う睡^いに、
 眼^めは、端^は眠^みの、態^{さま}に
 態^{さま}にして、あ、は、せ、た、る
 眼^めは、端^は眠^みの、態^{さま}に
 永^{とこ}劫^はの、熟^う睡^いに、
 名^な残^{ごり}の色^{いろ}は、
 あえ、か、の、口^{くち}に、
 永^{とこ}劫^はの、熟^う睡^いに、
 眼^めは、端^は眠^みの、態^{さま}に
 態^{さま}にして、あ、は、せ、た、る

消ゆるが如く 絶えはてぬ。

小き胸に 秘めたる

戀も 希望も 悲哀も

愁ひ 悶えも 跡絶えて

「さらば！」を告げぬ 久遠に。

(七)

燈火暗く 永久の

眠の樂園に 入りたりし

第四章

遺書の巻

(一)

あはれ處女の 室の内
照して 凄し 月の影

此の夕 乳母は さる室に
玄美ひとり を 招き寄せ

いと秘密やかに
深沈やかに
何をか少時語りけり。

さて先程操子より
臨終の際に托されし
遺書の二通を渡しつゝ。
玄美の手にぞ

『されば御身の寫眞を
柩の中に入れまほし、

賜ひねかしと請ひけるが
玄美は頓に承諾みつ。

(三)

その後三日目に賑はしく
野邊の埋葬いとなまれ
操子の死骸送られき
寂しき丘の墓の下。

玄美は亡せし嬢の魂

想おもひの胸むねを抱いだき泣な。
 新あらたに起おこる種くさ々の下もと。
 玄ひろ美みに寄よ宿どりの窓まどの
 葬かみ送おくり終はへて歸かへり來こし
 (三)

響ひびく梢こずえに悲かな哀しみを
 聞ききては胸むねを抱いだきけれ。
 謠うたふ會あひ葬かみ鳥すの哀あの唄うた

心こころの闇やみに迷まよひにき。
 行ゆくへを照てらす白しろ張はりの
 揺ゆらぐ光ひかり影かげを仰あやぐにも
 香かうの烟けむりも一ひとしほに
 供そなへの花はなも一ひときはに
 愁うれひ悲かなしむ額ぬかとこそ
 眺ながめたりけれ咽むせびつゝ。
 はた葬とむらひ送らひの鐘かねの聲こゑ

同じ學窓の園の友
 夕の寢床に臥せし後
 紀念の玉章をとり伸べて
 再びあはれ讀みにけり。

(四)

三日は永き花の艶
 脆きはいづれ世の姿と
 教へ給ひし言葉
 今こそ實にと仰ぐ哉

豊裕の家庭に産れ来て
 賢しくおはす御身をば
 よすがと頼みまゐらせて
 愛情得る妾の身
 神の庇護いとあつく
 此の身にあまる幸の園
 平和の庭に夢みつゝ
 憂事知らぬ妾の身

清涼	彼御	み薫	胸想
き風	の面	るに	にひ
流通	この	へ櫻	にま
れの	のも	仰ぎ	よかせ
	野に	し眺	め手
岸邊	の道	めつ	に
の上	の徑	花の	縫り
	遙	の蔭	頃日
	ひ		
	し		
	て		

絆	は	去	さ	何	此	心	御
は	し	ん	は	時	の	に	身
つ	な	ぬ	れ	か	世	沁	の
ら	く	る		は	ま	み	厚
き	病	月	妾		か	ぬ	き
	の	の	は	忘	る		
病	手	初	儂	れ	も	身	み
床	に	め	なく			に	心
の上	觸	より	も	ま	永	沁	や
	れて			る	久	み	
				ら	に	ぬ	
				さん			

琴ことのみ調しらべ
 八や雲ぐも琴こと
 活いけ花はな點てん茶ちや
 今いま一ひと度ど
 御おん身みの傍に侍らひて
 如何いかばかり…

人ひと生のよ心こゝろの儘に
 教おしへたまひしみ言葉ことばは
 日ひ毎ごと終ひれ日もす終よもす夜すから
 忘わすれまるらす
 時ときなきも…

歸かへらぬ旅たびの旅衣ころも
 もはや着るべき運さた命めにや
 日ひ々ごとに此の身は影もなし
 人ひとに見られん
 影かげもなし

仰あよぎみすれば
 此この身の臨終は
 空そらの月
 告つぐる如ごと
 身みを照らし
 露つゆの瓊
 袖そでには繁しげし
 露つゆの瓊

語らふ友の
あらなくに
夢の浮き橋
辿る如
想は遠く
飛びゆくよ
怪しき空の
雲の上

暫時にても
癒えもせば
此の胸に
聞え
拙き筆を
許しませ、
病の牀にて
操子より。

玄美 わななく
手を支へ
今しも身をば
打ち忘れ
再び三度
繰りかへし
讀みぬ！
叫びぬ！
泣き伏しぬ！

(五)

渠はその身に
かへる時
他の一通の
玉章を
あゝとり伸べて
ゆくりなく

狂へる如く讀みにけり。

戀しき戀しきあはれ君

熱き想の燃えまさる

胸を抱きて黙しつゝ

死の手を待てる妾の身。

想まゐらす數々は

山より高く海原の

底ひも知らず深かれど

今はた儂き身の運命。

既にいとしき妹の嬢

おはす御身を儂くも

慕ひまゐらす妾こそ

愚なりけれ淺ましや。

さはれ此の身や不如歸

血に鳴く想胸の中

御身はさこそ知りませめ

聞えじ 言はじ 記すまじ。

臨終の際の床の上へ

ものしまゐらす 遺書の文字

眺め給はゞ 妾が君よ

み覺りましね！ 此の想

もはや 歸らぬ 旅衣

着るべき時は 眼の前

あはれ迫りぬ！ 寄せて來ぬ！

立つべき時ぞ 今宵哉。

此の世の願望よ 「余が妹！」と

唯だみ心に 思してよ、

幸くおはしね 永遠に

平和ておはせ 永遠に。

下界に一人の 信賴者とぞ

縋りまつりし 清河の

玄美の君に まゐらする、

臨終いしまの牀とこにて
操子みさこより。

あはや
玄美ひろみの
眼まなこより

涙なみだは降ふりぬ！
雨あめ霰あられ

新あらたに湧わきて
流ながれゆく

涙なみだの泉いづみ
溢あふれたり。

渠かれ突うち爾ひに
立たち出いで、

犇ひしと玉たま章ざさ
抱いたきつゝ、

駈はせぬ！
丘かみなる
亡なき嬢きみの

無し聲こゑに冷つめたき
墓ほかの許もと。

第五章

誓詞の巻

(一)

墓ほかのみ前まへに
清きよ河かはは

人心なく 打ちまろび
指に土をし 穿ちつゝ
祈禱捧げぬ 叫ぶ如

「操子の嬢よ 亡嬢よ
謝すべき詞 知らぬ哉
才に貧しく 學淺き
愚かの身をも あゝしかく!

嬢よ 病の 牀の上

朝な夕なに 語るべき
友だにあらで 如何ばかり
悶えましゝや 唯だ獨

優しき嬢が 胸の中
語らず 言はず 秘めませる
想の焰! 燃ゆるとは
あゝ知らざりし 己が身よ。

悲しき哉や 余が胸に

現幽の籬高くとも
 嬢よ 苦痛の淵に 翳しね
 嬢がみ許に 捧げなん
 今より永劫に 身の運命
 憂き波いかに 誓ひなん
 神のみ前に 暴ぶとも
 おん身が永劫の「兄」たるを

嬢よ 許しね 愚かの身
 あはれ 處女の 在りければ…
 吾が身の「妻」と 定まれる
 既に御身も 知りおはす
 まいて 此身や 籠の鳥
 敬愛の扉 固くして
 御身の熱き 愛情を
 仰ぐ隙さへ 非ざりき

御身おんみのみ靈たま余わが心こころ
互かたみに翅つばさひろばへて
會あはなん語かたらん雲くもの上うへに。

御身おんみ眠ねむりね上あ天めの園その
此身このみ辿たどらん下この界よの野の
深く想おもひを結むすびつゝ
み許もとの園そのにまで
入いらん迄まで

(三)

玄美ひろみははやををら身みを起おこし
墓標ほへうの面おもを眺ながめつゝ
石いしかの如ごとく立たち居ゐしが
西にし方かたより降ふりぬ流ながれ星ほし。

折をりしも空そらははおおぎろなく
北斗ほくとはは冴さえて風寒かぜさむく
雲くもや無む心しんの額ねかにして
死しせるに似にたり天あめと地つち。

第六章
寄宿の巻

時^{ダイ}間の^ム流れ^{ナカ} 移^{ウツ}らへど
玄^{ヒメ}美^ミの^ミ涙^{ナミダ} 淀^{ヨド}みなく
玄^{ヒメ}美^ミの^ミ悶^{モトエ} 弛^{タラ}みなし、

(一)

されど 黙^{モト}して 秘^ヒめりたり。

晝^{ヒル}は 學^{マナ}園^ヰの 庭^{ニハ}の中^{ウチ}
快^ケ樂^{ラク}の 外^ミ觀^ミを 裝^{ヨソ}ひつゝ
夕^{ユフ}は 寄^{ヤド}宿^リの 床^{トコ}の中^{ウチ}
無^ム限^{ケン}の 熱^{ナヒ}涙^タ かたしきぬ。
夜^ヨ毎^{ゴト} 玄^{ヒメ}美^ミは 夜^ヨ半^ハの^ミ空^{カラ}
孤^{ヒト}身^ミの 悄^{アハ}然^レに 丘^カの^ミ上^{ウヘ}
迪^{タド}りゆきては 亡^{ナキ}嬢^{シマ}の

「墓標」 眺めて 佇みぬ。

(三)

ある夕 渠は 家郷の
その身の「妻」と 定まれる
いとしの嬢に 送るべう
遅るゝ筆に 認めき。

「朝な夕なに 吹く風の
いともの妻く 肌に沁み

世は寂寥の 秋の晩
御身やいかに 在すらん。

ものゝ悲哀は さなきだに
ひときは深き 頃日
此の身の心に 野分風
暴ぶる憂を 知りますや。

言はぬは 言ふに 勝るとし
覺りながらも なかくに

沈黙はつらき
此の胸よ
愚痴と
な軽蔑
給はりそ。

漏さじ
聞えじ
ものさじと

想へど
あはれ
黙しなば
代りて
陳べん
石もなく
誰かは
傳へん
此の想

さはれ
御身の
平和を
破りまつると
想ほへば

筆しも折れて
紙破れて
躊躇ひにしむ
文字の跡

それより
詳さに
操子女の

逝きにし
次第
遺書の由
秘むる
限なく
記したり
涙に濡れし
紙の上

さて後
斯かれば
哀なる
此の身の
胸を
推察してぞ

親と親とが 定めたる
縁しの結び 解きましね。

絶ち給はれよ 縁の糸
余終生まで 獨身の
生活しなば 如何ばかり
慰藉の泉に 息ひえん。

さはれ縁しを 断たばとて
互に抱ける 胸の愛

如何でか失せん 移らはん
悩みなましそ 痛みそよ。

他家の家庭に 入りまして
奏で給ひね 幸の曲
此の身は 芝生の 蘆の内
み空眺あて 合奏さん。

同じ家庭に 笑みあふを
誰かは忌まん さはれ嬢！

希望の理想の影消えて。
闇に嘯く身の運命。

嬢よ雄々しく同情の

眞澄の露を愛の瓊

賜はれかしと懇切に

熱き心を認めぬ。

燃ゆる想の溢れたる
震へ亂れし文字の跡

誰かは覺りあらざらん
誰か覺らざる胸の中。

第七章

雪華の卷

(一)

來	み	飛	降	孤	脚	先	清
し	空	び	り	身	氣	つ	河
方	の	か	み	残	を	頃	玄
	景	ふ		り	病	よ	美
往	色	窓	降	て	み	り	は
く	を	に	ら		て		
末			ず	留	か	は	
	眺	身	み	守	り	し	
想	め	を	雪	居	そ	な	
ひ	入	倚	の	人	め	く	
出	り	せ	華		の	も	
づ		て					

皆	勇	休	寄	塞	往	吹	秋
伴	氣	息	宿	り	來	雪	は
れ	振	の	の	て	の	亂	何
立	は	幸	友	稀	道	る	時
ち	ん	の	は	よ	に	ゝ	し
て							か
	兔	一	日	人	關	冬	過
往	狩	日	曜	の	の	の	ぎ
き		を	の	脚	戸	空	ゆ
に		ば			の		きて
けり。							

野邊に山邊の旅の空
 露けき草に宿らんと
 儂き希望を抱ける身
 既運命を捧げし身
 憂事知らぬ品子女を
 悶えの淵に余の共
 沈めえざりな！余が願
 何どか無情き品子女に

余が胸あまり無情か
 屏弱き處女よ品子女は
 その身の縁を同情の
 犠牲と捧ぐる能はじや
 さはれ余のみ下界にて
 彼女「夫」にもあらざらん
 共に「知覺」の有らざりし
 幼き時代の縁なれば

(二)

然なりよ 責任を身に帯びて
余が友垣の 好き君と
樂しき家庭 つくらさん
さらば 余さへ 安らかに！

渠は 想ひの 種々に
群り起る 胸抱き
我を忘るゝ 折からに
玉章 着きぬ 品子より

(三)

揺るる想を 静めつゝ
やんら開きて 讀みにけり、
初めの程は 昨日今日
寒さきびしき 事の由

家族そろひて 健かに
春さり來れば 學び終へ
榮光の衣に 包まれて

かへり來ますを 待てりなど。

玄美は 更に 讀みゆきて

二伸と記せる 文字の姿

眺めし時よ 突爾に

蒼褪めたりき 顔の色。

遅るゝ心 勵まして

把りては 落つる 水莖を

抱きて崩るゝ 机の上

涙の露に 霑しぬ。

ものして捨てつ 封じては

またもや破りつ 幾度か

あはれ 御身の 御心を

推し侍らぬ 身ならねど。

み許しましね 妾が君よ

一日も早く 聞えんと

想駈すれど 露の瓊

はふり落つるを 如何にせん。

處女心の 淺ましき
斯くとばかりは 想きや
君よ 幾度も 愚かなる
妾を憂しと 思しけん。

想ひ出でては 忍び泣
微睡む隙も 束の間も
先き立つ涙に 絆されて

あはれ 今日とは なりにけり。

讀みゆく玄美の 顔の色
いよ、蒼褪め 渠の身や
もの狂はしく 戦慄きて
支へかねたる 風情哉。

(四)

人の數にも 入りがての
拙き妾の 身の上に

み心惱まし
胸に響きて
給ふこそ
畏けれ。

さはれ 妾の 脊の君よ
— 今はた如何で 脊の君と
ものしまゐらす 身にやそも—
玄美の君よ 妾が君よ。

縁の結 解きましね
絶ち給はれよ 縁の糸

あゝ此の文字を！ 此の文字を！
拜しまつりし 其の時よ……

渠は 伏したり 書簡の上
涙は 流がれぬ 書簡の上
次ぎの行の 五六行 見えわかず—
破れて 文字の

「必ず 妾の 身の上
惱ませ給ふ 事あらで

み心のまゝに (文字にじみ
さだかに見えず) おはせかし。

妾はせめて此の書簡を

君が紀念と身に添へて

いと戀ひしくなつかしき

御身の影を 偲ばなん。

もはや 玄美は 支へかね

犇と玉章 抱きてぞ

狂へる如く 打ち仆れ
叫びの聲を 漏らしける。

時しも 吹雪 一しきり

激しく窓を 襲ひ來て

響きのひまゆ 友垣の

聲は聞えぬ 門の口。

玄美 やりく 心づき

起ちて 玉章 整へつ

父^{ちち}五^ご年^{ねん}を^を終^{つひ}へ^へて
母^{はは}他^た郷^{ごう}に^に
おはす

(一)

家^{いえ}郷^{ごう}に^に
送^{おく}り^りた^たる^る
清^{きよ}河^かは

家郷の巻

第一章

(上)

中編

迎^{むか}へ^へに出^いて^てき^き
その身^みの姿^{すがた}
正^{ただ}しつゝ
笑^{あは}装^{やそ}ひ。

(前編終)

榮光はえを翳かして 歸かへり來きぬ。

父ちち母ははいかに 喜よろこびし

兄あに弟あにいかに 笑わらまひたる、

村むら人びといづれも 渠かれの身みを

崇あがめ稱讚たへぬ 「學まな者びと」と。

權ごん左さ 吾ご作さの 子こ供ども等らも

助すけ六ろく 初はつも 集つどひ來きて

先せん生せい様さま！と 崇あがめつゝ

賑にぎはしかりき 渠かれの門かど。

小う學い校まなびを 終まへし者もの

それだに稀まれの 此この村さと落とよ

「榮えい譽ぎよ」の冠かむり 「學まな才さい」の環くわの上うへ。

あはれ落おちたり 渠かれの上うへ。

(二)

稱讚たの唄うたの 聲こゑみてる
窓まどに向むかひて 玄ひろ美みこそ

玄^{ひろ}來^き稱^たそ
 美^みし讚^{たへ}の
 の方^{かた}の身^み
 嘆^{なげ}き將^{ゆく}來^す
 いや想^{おも}ひ出^いで
 深^{ふか}し。

聞^きく
 謳^{うた}ふなる
 に
 つれ

聲^{こゑ}を
 榮^は光^えを
 謳^{うた}ふなる

嬉^{うれ}しとのみぞ
 樂^{たの}しとのみぞ
 仰^{あよ}ぎしか？
 眺^{なが}めしか？

噫^あ渠^{かれ}
 父^{ちち}兄^{あに}
 母^{はは}弟^{あに}
 のの
 額^{ぬか}面^{おも}
 のの
 色^{いろ}笑^{えみ}

寢^よあ誰^{たれ}誰^{たれ}
 衣^ぎかか
 の人^{ひと}はは
 袂^{たもと}知^しれ見^みけ
 をずん
 揩^{しぼ}り玄^{ひろ}美^みこ
 けれそ
 露^{つゆ}胞^{むね}

想^{おも}ひ悲^{かな}し
 ひの翅^{つばさ}空^{そら}の
 駈^はせにけれ
 雲^{くも}の上^{うへ}

第二章
卯花の卷

(一)

卯うのはな白しろく
咲あきは匂ほふ
里さと川がは堤づみみぎひだり
手てをと把とりて
夕ゆふ日ひをかた
肩かたに
語かたりゆく。

春はるにあはれて
哀あいの唄うた
曲まじもあはれに
鶯うぐいすの
渠か等ら二ふ人たりに
咽なぶ如こ
山やま井いのか下もとに
出いでたちて
佇たぐみぬ

垂首れながら品子女は
 溢るゝ涙押し拭ひ
 いと断れくんに語るらく
 何どか苦しめ参らさん。
 さはれ御身よ兄の君！
 妾が父母の問ひまさば
 此の身は如何に答ふべき？
 想へば辛き……其時よ』

「さばかり心な惱めそよ
 東都の旅に立たん時
 爾が父母の御許に
 文して事状を明白さん。
 年考いませる御胸にも
 いかで涙のなからんや、
 此の身を哀れと思しなば
 な儚さを啣ちそよ。」

無^む下^げに沈^し憂^うみて
 御^{おん}身^みの姿^{すがた}袖^{そで}の露^{つゆ}おはします
 眺^{なが}め入^いる身^みは如何^{いか}ばかり…
 御^{おん}身^みの夫^それに勝^{まさ}るなれ。

品^{しな}子^この嬢^{きみ}よ余^わが妹^{いも}よ
 「妹^{いも}背^せ」の縁^{えはし}断^たたばとて
 忘^{わす}れなましそ永^{とこ}劫^{しん}に
 誓^{ちか}りは深^{ふか}き兄^{あに}と妹^{いも}。

健^{すこ}か^かにこそ在^{おほ}されよ
 幸^{さい}多^{おほ}かれと祈^{いの}る身^みは
 山^{やま}河^{かは}遠^{とほ}く隔^{へた}つとも
 何^い時^つか御^{おん}身^みを忘^{わす}るべき！

言^いはじと想^{おも}へど愚^ぐ痴^ちそゝろ！
 あゝ知^しりますや己^{おの}が胸^{むね}
 謝^{あや}罪^{なみ}の血^ちは燃^もえて熱^{ねつ}沸^わくを！
 血^く管^たや裂^さけんの熱^{ねつ}沸^わくを！

語りし玄美が
腕に挫と品子
ははる女は
暫時はあはれ
儘に咽び泣

(三)

「あゝ兄君よ
涙しぐるゝ窓の下
妾は御身の平和を

祈ぎまゐらせて
侍らなん。

雲の八重路を隔つとも
迫めては音信の玉章を
あはれは恵ませ給ひてよ
健かに在せ！……御身こそ

やをら二人は歩み出で
來し路の方へ向ひしが
露草しげき徑暗く

簷のびの金露草に垂さがりたる
 風鈴の音おと細はやけく
 池の噴水あけ涼すいしさ
 増まして妙たへなり庭にはの景けい

(二)

夕ゆふ立たち過すぎし
 緑みどりの草木くさき
 彩あやをし翳かげす
 庭にはの面おも露つゆの瓊たま夕ゆふま暮くれ

姿すがたは消きえぬ
 闇やみの中うち

第三章

沈黙の巻

(一)

鐵かねも鎔とけんの
 夏なつ最も中なか

やうく日光かくろひし
西に向へる竹の椽
持つとしもなく團扇をば
手にして玄美ぞ佇める。

湯上り衣涼しげに
おほろに暮るゝ池の面
眺め入りつゝ唯だ獨
想や深き額にして。

肉よき頬や何となう
胸の悶えを語るめり
艶香は褪せて蒼褪めて
雲れの影を浮べたる。

(三)

今しも全く暮れ果てゝ
燈籠の光領狭く
庭の面わをうばたまに
鎖して迫りぬ闇の影。

いと嚴かに 見ゆるなり
 母なる君は 嬌しげに
 そと愛しみの 膝進め
 先つ日 聞えし 彼の事を
 如何に考ふ？と 語ります
 されど 玄美が 應答せず
 手を拱きて 居たりしを
 眺め在しし 父の君

玄美は 尙ほも 動きなく
 垂首れるたるが 垂乳根の
 母の優しき 聲聞き 入りにつれ
 さる室にこそ 入りにつれ
 常にはあらぬ 面わにて
 在すは 渠の 父と母
 玄美が入りし 室の中
 (四)

怒いかりの默もた然しゆ 破やぶれたり。

「玄ひみ美み！ 汝いましは 如い何かなれば

いかなる事ことの 状よしありて

承うべ諾なまざるぞ！ 余わが命いのちを、

知しらずや 父ちちの慈あつくしみ愛あひ。

東あづまの都みやこに 登のぼりなば

誘いざな惑なひの手てに 多おほかれど

其そをし恐おそれて 爾しか云いふに

非あらぬことをば 知しらざるか。

此この身みが縁えはを 獨さ定ためしが

汝いましの胸むねに 不み満たして

しかく結むす婚むを 避さくるにや？

はた 道みち徳ちならぬ 心こころにか？

此この身みはいとゞ 齡としたけて

妻つまを娶めとりし 悔く深ふかし、

今いまはた 汝なれが しかなすを

如何で看過ごし得べきやは。

「學の時代」と？ さはあれど

結婚の式を譽げしとて

汝が心の固からば

何かは障の有るべしや。

老年に瘦せたる膝の上

一日も早く愛孫をば

抱かましかばと願ふ身の

心は汝に通はじや』

斯くと語りし父の君

應答いかにと窺へど

玄美は固く黙しつゝ

手を拱きて居たりける。

(五)

母も種々諭せしが

親に嬌しき渠ながら

東風に吹かるゝ 馬の耳
夫れか 否じか 應答せず。

父は怒に 燃えにけん
さと立ち上り 室を出て
彼方の室に 移りしが
玄美は 尙ほも 黙しゐつ。

(六)

少時時へて 憂はしく

「玄美は母に 語りける
母君！ さこそ 此の身をば
不孝の兒ぞと 思すらめ。

さはれ 不孝の 罪をさへ
敢てなす身の …… 母君よ
此の身は既に 亡きものと
思し召されて 給はじや。

「學の道を 知り初めて

親に仕ふる人の道
知らずなりしと父上の
あゝみ言葉よ……み言葉よ……

文の學林の泉の邊
詩の冠を求めんと
願ふ此の身よ現今にして
妻をし娶り能ふやは

あはれ 此の身や 頃日

慈愛厚きみ言葉に
反きまゐらせ一言の
應答聞えん詮どなき』

さては心中に叫ぶらく
「胸や裂けんの此の想！
知らずて在す父と母
想へばあはれ 儂なしや』

斯^かく^て 文^{ふみ}月^{づき} 末^{すへ}つ^方かた
 生^{うま}れ^し 家^さ郷^とを 後^{あと}に^して
 學^{まな}び^の 扉^{とびら} 開^{ひら}かん^と
 立^た美^み 東^{あづま}都^まに^登り^けり。

儂^{ぼん}なき^渠を^を 想^{おも}ひ^つゝ
 縁^えの^糸を^を 結^{むす}び^得て^で
 泣^なき^にし^許嫁^{よめ}の^門の^許
 亂^{みだ}る^ゝ 足^{あし}を^を 運^{はこ}び^てぞ。

覺^さら^ぬ 渠^かを^を 慕^{した}ひ^つゝ
 熱^{あつ}き^想を^を 語^{かた}り^得て^で
 逝^ゆき^にし^亡嬢^みの^墓の^許
 湧^わき^來る^涙 注^そぎ^てぞ

(下)

第四章
青山の巻

(一)

家郷遠く二百餘里
 雲井隔つる東の
 都に玄美が登りしゆ
 もはや五年過ぎゆきぬ
 その身の母が親戚なる

浦見巖の許に居て
 學の庭に通ひつゝ
 渠は辿りぬ文學の園

(二)

渠の希望や想ふ如
 その身の運命を描ぬきて
 亡嬢が永眠れる墓の邊に
 焼きて埋めん願ひのみ

狂者きやうしやと人ひとは 嘲あざわらん
没常識ぼつじやうしきと 輕侮かろそまん、
されど 空そら吹ふく 風かぜとだに
響ひびやあらし 渠かの耳みみ。

日ひ毎ごと 終日ひねり 只ひた管すに
いそしみ 學まなぶ 榮光はえ見みえて
級クラスの友ともに 優すぐれてぞ
首席しゆは 渠かに 讓ゆづられぬ。

浦見うらみの娘むすめ 幸さい枝え子こは
渠かが閑暇いとまの 折をりふしに
窺うかがひ 寄よりて 學まな才さい深ふかき
玄ひろ美みに 教をしを 請こひ居ゐたる。

(三)

或あるは 歌うたなど ものしては
互かたみに 送おくり とり 交かはし
懐ゆかし 優やさし の 批さ評めなど
樂たのしげにこそ 爲なし居ゐしか。

されど 玄美は 一度も
 彼女 の 居間 と 定まれる
 室 に入りたる 事もなく
 近づき 寄るを 厭ふめり。

夕餉 終りて 少時を
 隣れる 公園に 手を曳きて
 逍遙 せんと 幸杖子が
 請ふを 避けしも 幾そ度。

渠は 休息の 日曜日
 青山 墓地の ところかしこ
 孤身 さまよひ 夕ま暮
 歸るを こよなく 樂しみき。

(四)
 景色 妙なる 爲かそも
 人足 稀なる 爲かそも
 西詩 の 一篇 携へて

幸枝傍に 歩み來ぬ。

(五)

惡魔の息に 觸れし如
玄美もの憂く 想ひしも
避くる道さへ あらなくに
俯向き居たり 憂はしく。

彼女近づき 手を握り
何をか語る 折からに

辿りゐたりき 唯だ孤身。

猛夏の初期よ 常の如
朝よりして 友もなく
生木の下に 佇みて
西詩を誦しつゝ 居たりけり。

時は移りて 入相の
光斜めに 映ゆるとき
羞らはしげに 笑まひつゝ

田舎よりして 歸り路の
巖の姿 仄見えぬ。

渠驚怖きて 垂首れつ
更に見やりし 其時は
もはや姿は 消え失せて
灰色 深し 空の雲。

第五章

暗雲の巻

(一)

浦見 常より 注意して
日々の玄美の 舉動を
窃かに窺ひ 居たりしが
怒に燃えぬ 渠の胸。

彼^かの^ひ日^ひ 灰^{はい}か^に 眺^{なが}め^たる
青^{あを}山^{やま}墓^ぼ地^ちの^の 黄^{たそ}昏^{がれ}の^の 眺^{なが}め^たる
光^{あり}景^{さま}の^の み^かは^は さ^る人^{ひと}の^の
秘^{ひそ}か^に 告^つぐ^る 書^よ簡^{かん}を^を得^えて。

浦^{うら}見^み 少^{しば}時^しは^は 疑^{うた}問^{がひ}と
迷^{まよ}ひ^の 闇^{やみ}に^に 蔽^{おほ}は^れて
思^{おも}慮^{ひかり}に^に 惱^{なや}み^しが
儂^{ばか}な^き 断^{こと}定^めを^を 抱^{いた}き^たり。

情^{なさけ}に^に 熱^{あつ}く^く 學^{まな}才^{さい}深^{ふか}く
心^{こころ}明^{あきら}哲^{てつ}の^の 渠^かな^がら
誤^ご解^{かい}の^の 雲^{くも}に^に 鎖^とさ^れて
聖^{せい}き^眼や^や 曇^{くも}り^けん。

竟^{つひ}に^に 浦^{うら}見^みは^は ゆ^{くり}なく
玄^{ひみ}美^みの^の 父^{ちち}に^に 何^{なに}事^{こと}か
丈^{たけ}に^に 餘^{あま}る^る い^と長^{なが}き
玉^{たま}章^{あきら}を^をこ^そ 送^{おく}り^しか。

(三)

「玄美！ 此の家を見捨て何處とも
 汝！ 想ふが儘に出で、往け！
 余が家の者ならず」

(三)

「想ひがけなき 渠の言！
 夢か戯言か 空言か」
 しかく玄美が 聞きたるも

「回答の玉章 さらる程に
 渠の手許に 駈せ來り
 その夜 玄美をさる室に
 嚴かにこそ 招きけれ」

巖のあはれ 顔の上
 憤怒の焰 燃えあがり
 眼は血ばしりて すすまじく
 小鳥を攔む 峯の鷺

玄美 決めぬ 心の中。
 浦見再び 言ひけらく
 「心に曇を 懐ければ
 應答なさんの 言葉だに
 非ざるべきぞ 道理や」
 玄美の顔は 突爾に
 死せるが如く 變りゆき

(四)

げにや宜なる 事にこそ。
 玄美は 少時 應答せず
 夢の浮き橋 辿る如
 忙然の見えに 立てる如
 いと訝かしく 見揚げたり。
 怒に燃ゆる 渠の顔
 うら恐ろしき 額にして
 静まるべくも 見えざれば

悶えの影を漏さじと
秘むる身體はわななきぬ。

(五)

室の外傍に佇みて
秘かに由を聞き居たる
幸枝子あはれゆくりなく
狂ふが如く駈せ入りつ。
父の傍に坐を占むる

母に縫りて跪づき
崩れ仆れぬ膝の上へ
叫びもやらず咽びつゝ。

慌しくぞ駈せ入りし
幸枝の方をそと瞥やり
黙して出づる玄美こそ
手負の獣の風情哉。

無^む限^{げん}の^の想^{おも}ひ
 眺^{なが}め^め入^いり^りて^ては^は
 千^ち々^々に^に碎^{くだ}く^くる^る
 や^やを^をら^ら佇^{たぐ}む^む
 湖^いの^の畔^き
 今^{いま}更^{さら}に^に
 止^{とど}ま^まら^らず^ず

玄^{ひろ}美^みは^は孤^{ひとり}身^り
 想^{おも}ひ^ひ忍^{しの}ぶ^ぶが^が
 垂^う首^な然^{ぜん}の^の影^{かげ}を^を
 勝^{かち}に^に
 地^ちに^に曳^ひきて^て
 步^{あゆ}み^みつ^つ
 丘^{おか}の^の下^{もと}
 迪^{たど}り^り來^きぬ^ぬ

第六章
 湖畔の卷

(一)

一^いき^きは^は寂^さび^びぬ^ぬ
 睡^う眠^まの^の床^{とこ}に^に
 耳^{みみ}を^を摩^つき^き
 も^もの^の騷^{さわ}が^がし^しき^き
 静^{しづ}まり^りて^て
 街^{まち}の^の中^{うち}に^に
 夜^よ半^{はん}の^の空^{そら}

寫すに難き？ 人の世や。

「心の眞」曇れるか
 「眞の光」映なきか
 「眞理は最後の勝利者の
 意味よ 竟に 亡びしか。

寫して見せんの 余が心
 誤解の雲に 鎖されぬ
 胸より胸に 此の想――

(二)

屠場の場に 追はれゆく
 牛にも似たる 態にして
 少時 眺めに 萎れ居し
 渠 突爾に 叫ぶらく。

「人の姿を 寫すべき
 術は巧妙の 現今にして
 何どか 心の眞」をば

否あらず！ 何なにをか 表彰あすべき。

余われ 現いま今ま悲かなしむ 時とき期まならじ

苛せ責めの 撈し篋もよ 怒いかりの 矢や！

疾は憎みの 毒は焰のよ 呪のの 火ひ！

い ざ や！ 此この身みに 降ふり 注そげ！

余われ 永とこ久しへに 黙もすとも

石いしは 代かりて もの言いはん！』

渠かれは 唇くちびる 嚙かみしめて

撞どうと 仆たよれぬ 畔さしの上うへ。

(三)

さては 思おも慮ひも 本こ性ろねも

絶たえしか あはれ 伏ふせしまゝ

息いきさへいと 絶たえどに

死しせるが如ごとき 姿すがたかな。

斯かくてよ 水みづ面も 月つきの面おも

眺ながめ居ゐたるが やうく に

その身を起し 聲低く
渠は 眩き 漏しける。

『眞澄の月よ 眞心の

化したる瓊よ あゝ雨は
何どしか無情く もの凄く
此の身の顔を 照すなる？

あはれ 過ぎにし 春の夕
彼の亡嬢ともに 手を把りて

花の蔭より 眺めたる
雨は 快樂に 笑ましめし。

さるを その年 果てずして
永劫に眠りし 嬢の上
冷たき影を 濺ぎては
此の身に 鐫りき！ 征矢の跡。

まいて 今宵の 雨が面
見るにえ堪へぬ もの凄さ！

死しの浪なみ寄よする
竟つひに此この身みを
誘さそふにや』
淵ふちの中うち

渠かれは 叫こゑべど
再ふたび 呼よべど
湖いけの 面おもてを
折をりし 凄すこし
眺ながめ 應こたへなく
鐘かねの 音ね 月つきも だし
入いる

(中編終)

後編

(上)

第一章

富浦の巻

(一)

玄ひろ美みは 先さきつ日ひは しくも
誤ご解かいの 征せい矢やを 身みに 負おひて

湖上こじやうに碎くだくる 月つきの影かげ
眺ながめてよりぞ 病やみ伏ふしぬ。

されど 醫師いしを 招まねくべき
はた尚なほ食物かを 求もとむべき
代しろ金かねさへ有あらぬ 病やまひの身み
寄よすよ 迫せまるよ 飢うみの風かぜ。

渠かれは その身みの 生ライ命イフにも
替かへ難がてにこそ 想おもへりし

書よ籍みをも あはれ 賣うり拂はらひ
暫しば時の食ばんに 當あてしとか。

飢うみと 渴かしの 領れうの中うち
わびしき棟むねを 列つらねたる
貧まづ民しん窟くわの 簇むれに入り
辛からき暮くらを 爲なしとか。

飢うみと 病やまひの 牀とこの上うへ
あはれ信よ頼す者がも あらぬ身みの

來し方 將末 想ひては
玄美の胸や 如何なりし。

(二)

信念の厚かれど

「斯くても 神の在すや？」の

疑ひの雲 群るも

宜なる哉や 渠の身の。

しかく苦しき 谷の底

悶えの沼に 沈みてし
身の儂なさを 同情やる
友ぞ救助の 手を伸べつ。

友は 玄美の 事状
知らんの方 向に 迷ひしが
辛くも 尋求め 訪ひて
慰めたりき 朝な夕。

(三)

平へい和わのさし暁あけぼの
 詩うたのかげ影かげ浦うらにま舞まひ
 人ひとのなさけ情なさけ愛あひの
 太たい古このあつ光あつ景まよ
 暖あたたか富とみのうら浦うら

(四)

竟ついににあは美みはさき先さきつ日ひゆ
 友とものすす勸すす誘めを
 富とみのうら浦うらなるうみ海うみのきし岸きし
 逍さう遙やうふこと事ことと
 なりにけり。

日ひ毎ごとにたづ訪ね來きて
 情なさけ愛あひけあつ厚あつきこと言ことのは葉はの
 數かず々々深ふかきあはれれ同あは情れに
 渠かやな涙なをな拂はひけん

語かたらず言いはず秘ひめたりし
 沈も黙たのと扉とゆるまねど
 漸やう次く友とものい慈い悲く受うけにける。

朝あしたの霧きりに漕こぎ出いでて
 夕ゆふ榮はえのせて歸かへり來くる
 漁あ夫まの舟ふねの權かの音ね
 靜しづかに響ひびく詩うたの海うみ
 白はく衣い装よそへる詩しの神かみの
 崇たもとき姿すがたそれの如ごとの
 け高たかき富とみ士のしの微ほ笑あはれ
 浮うかぶる光あかり景まの妙たなりや。

文ぶん華くわの榮は光えに遅おそれゆく
 怨うらみはあれど慰なぐ藉さの
 泉いづみ溢あふれて睦むつの音ね
 あゝ歡よろこ喜こびの聲こゑぞ満みつ。
 一いっ面めん遠とほき海うみの彩いろ
 青あおき姿すがたの鏡かがみかや、
 抱いだきて映うつる三面さんめんの
 山やまには里さと見みの古ふる跡あと蒼あさし。

閃ひらめく「自し然ぜん」の詩うたの影かげ。
 綾あやうるはしき雲くも間まより
 美みの神かみ装よそふ羽は衣ころもの彩あや。
 仰あおげや高たかき空そらの彩あや。
 漏もるゝよ靈くしき幸さちの曲きょく。
 秘ひめます琴ことのみ調しらべか
 富ふ士じの高たか峯ねゆ舞まひ出いでて
 空そら渡わたらふ愛あいの神かみ。
 (五)

夕ゆふは清きよき漁いさりの灯ひ。
 彼かな沖た此こ磯いそにゆらめきて
 星ほしの宮みや殿とのの宴うた會けにや
 漏もるゝよ聖きよき愛あいの詩うた。
 鐵かねさへ鎔とけん夏なつの日ひも
 涼すずしき風かぜの慰なぐさ藉せきに
 端ねむり睡りや安やすき避暑ひしよの浦うら。
 姫ひめ百ひゃく合り薰かる岩い蔭かげの
 避ひ暑しよの浦うら。

望^{のぞ}めや遠^{とほ}き海^{うみ}の彩^{あや}
脱^おつる隈^{くま}なく照^てり渡^{わた}る
妙^{たへ}なる日^ひ影^{かげ}の映^{はえ}うけて
耀^{かざ}く艶^あ彩^やの浪^{なみ}の華^{はな}

(六)

あゝ詩^{うた}の影^{かげ}浪^{なみ}の華^{はな}
絶^たゆる間^{ひま}なき浦^{うら}にして
朝^{あさ}な夕^{ゆふ}なに磯^{いそ}の上^{うへ}

病^{やまひ}の身^みをば横^{よこた}へつ。

波^{なみ}猛^たけり來^くる巖^{いは}の上^{うへ}

横^{よこた}に踊^{をど}る蟹^{かに}の姿^{さば}
湖^{うしほ}に揺^{ゆら}ぐ藻^も鹽^{しほ}草^{くさ}
眺^{なが}め暮^{くら}しつ終^{ひれ}日^ひを。

あるは漕^こぎ出^いで漕^こぎかへる
蟹^{あま}の釣^{つり}舟^{ふね}眺^{なが}めや磯^{いそ}唄^{うた}に
地^ち網^{あみ}曳^ひく人^{ひと}の磯^{いそ}唄^{うた}に

耳かたむけつ
砂の上。

第二章

巖頭の巻

(一)

窃かに名のる
松の聲

静かに奏づる
浪の詩
夕日なめに
落ちてゆく
安息の浦に
響くなり。

葡萄色なす
いさゝ浪
揺ぐや
天の
畫神の
秘めの
畫筆を
濯ぎしか
映光美はしや
潮の彩。

(二)

永劫ととにに涸かれざる
 永劫ととにに冷ひえたる
 想おもひのの翅つばさは
 ししかかくく其そのの身みをを
 忘わすれれつつゝ
 北きたにに | 北きた |
 墓はかのの下もと
 涙なみだのの上へ |

西にしなるる空そらをを
 冷つめたたきき影かげをを
 眺ながめめてては
 抱いたききししめめは
 仰あやぎぎてては
 追おひししききぬぬ

北きたなるる山やまをを
 ああつつきき姿すがたをを
 追おひししききぬぬ

(三)

回おもひひのの血ち潮しほ
 抱いたききてて玄ひろ美み
 海うみのの面おもわわをを
 佇たぐみみににけけりり
 熱あつきき胸むね
 唯ただだだ獨ひとり
 望のぞみみつつゝ
 巖いはのの頭さき
 慰なぐさむむやや富とみのの浦うらななががらら
 日ひ々々のの煩わづ悶ものの強つよくくししてて
 寒さむれれのの瘦やせせたたるる身みのの姿すがた
 哀あはれれにに映うつすす水みづ鏡かがみ
 身みのの姿すがた

拱こまぬき居ゐたる手てはくづれ
血ち潮しほは湧わきて漲みなぎりて
裂さけんの胸むねを支さへかね
渠かれは仆たよれぬ巖いはの上うへ

(四)

折をりから渠かれが先さきつ日ひゆ
互かたみに知しりあひ慰なぐさ藉せきの
厚あつき言こと葉はを與あたへたる

處と女め寄より來きぬ 渠かれの許もと

— 彼かの女ぢよの事こと状じやうは知しらねども

悶もたえをしめす 蒼あをき額ぬか
眺ながめし渠かれは同あは情れみの
涙なみだをこそは流ながしけれ

されば濱はま邊べに出で會あひては
語かたらひながら汀みきはの邊へ
絆はたし辛からきを 啣かこちあひ

處女は 今尙ほ 二月の

(六)

共に暫時は 樂しげに
語らひ居しが 程もなく
語る言葉の 潮はも
悲しみの淵に 流れけり。

親しき己が 兄弟に
継るが如く 手を把りぬ。

辿りし事も 幾そ度。

(五)

玄美は やをら 起き直り
悲しき想の 翅を閉ぢつ
彼女の方 に向ひては
矯しく漏しぬ 頬の笑。

處女も 笑を 湛へつゝ
恰も 永く 別れ居し

家郷遠き旅の空
 山田の者に侍るかし。
 妾は神風の伊勢の國
 吉備の國にて在すとや
 御身は遙か眞金吹く
 沈黙は竟に破れたりせん。
 熱きみ言葉仰ぎつゝ
 何をか隠しまゐらせん。

空に匂へる梅の花
 寒れし身にも香や高く
 その名を緒方秋子とぞ。
 唯だ同情の只管に
 種々告ぐる慰藉の
 玄美の言葉に感動ぎけん
 彼女垂首れ語らる。

「此の身にあまる同情の

此^この身^みの六^む歳^{さい}の年^{とし}なりし
 家^い庭^へを蔽^{おほ}ひぬ闇^{やみ}の影^{かげ}。
 夕^{ゆふ}燈^{ともし}火^{しび}消^きえし如^{ごと}く。
 父^{ちち}の身^み持^{もち}の悪^{あし}くして
 語^{かた}り出^いでんも羞^{はづ}かしや
 不^よ幸^{こう}の雲^{くも}に蔽^{おほ}はれて
 幸^{さい}快^{たの}樂^{しみ}の光^ひ明^{かり}なく
 涙^{なみだ}の淵^{よち}に沈^{しづ}める身^み。

草^{くさ}を褥^{しとね}に野^のの宿^{やどり}
 不^は圖^なく此^こ處^{ところ}に語^{かた}りあふ
 あはれ宿^{しゆく}世^せの靈^{たま}しき哉^{かな}。
 下^{この}界^よに光^ひ明^{かり}得^えたる如^{ごと}く
 想^{おも}ひまゐらせ御^{おん}身^みはも
 さこそ煩^{うるさ}く思^{おも}はさめど
 暫^{しば}時^じみ許^{ゆる}し給^{たま}はりね。
 妾^{わらは}は幼^{こゝな}き頃^{ころ}ゆ

生母は病に犯されて
三人の兄と妾とを
残して冥府に死にき。

夫れより父は現今の母
娶へませしが慨たくも
酒と藝者に眼はくらみ
家内に在す事ぞ稀れ。

繼母も心を悩めつゝ

祈ぎつ怒りつ諫むれど
弛む様子なく繼母の身を
いと悪しざまに想ひける。

斯くて年月移りゆき
妾が十三才の春の頃
他ゆ藝者を娶るべり
繼母に離縁をとらせにき。

さはれ藝者を娶るには

代しろ金かねに貧まっしく 此この身みをば
買うらんとせしを 不は圖なくも
三たり人にの兄あにぞ 知ししましつ。

兄あに等には直たちに 駈せせ廻めぐり
近ちか隣の親うか族らに 招まき來きて
やうく 繼は母はを 復もとの如ごと
静しづめて暫しばし時とき 暮くらしけり。

さるを 迷まよひは 止とどまらず

またも藝まひ者めを 迎むかへんと
計は畫かりまししを 兄あに等たちは
心こころに誓ちかひて 争いさひき。

されど 想おもひを 曲まげまさず
好このむが如ごとく 爲なすを 見みて
固かたく諫いさめし 生あ兄に三たり人に
怒いかりに觸ふれて 家い出でしぬ。』

(七)

彼女かのぢよ 涙なみだを 支さへかね
 袖打そでうち 蔽おほひ 咽むせびつゝ
 少時しばしば 詞ことばや 絶たえ 身みを正ただし。
 黙もくし 居ゐたるが 身みを正ただし。

「散ちりゆく花はなに 盡つきやらぬ
 名残なごりを惜をしむ 額ぬかにして
 霞かすみぞ 込こむる 春はるの 晩くれ 遙ほろばると。
 馴なれにし 家郷きやうとを 春はるの 晩くれ 遙ほろばると。

三人たりは 共ともに 森もりの 蔭かげ
 人眼ひとめを さけて 水みづ盛もれる
 別離わかれの 盃さかづき 交かせしと 祈いのりつゝ。
 健すこやかならんを 祈いのりつゝ。

尚なほ 三とせ年ねん目めの 此この 夕ゆふ
 此處こゝに 歸かへりて 集つどひ 寄より
 互かたみに 状なり況ゆき 語かたらん と
 固かたく 誓ちかひて 立たちしとか。

さして往方や
 何處とも
 目的はあらず
 定めなく
 西に東に北の方
 己がむきく
 別れてぞ
 出でし翌日
 夕ま暮
 森の蔭にて
 認めし
 書簡しも母の
 許につき
 斯くと二人は
 知りたりし

幼心の此の身にも
 あまりに無情き父の業
 怨みに燃ゆる胸のまゝ
 父に語りて諫めにき
 父は怒りて妾にも
 何處へなりと往けよとぞ
 聲いと高くのしりつ
 妾や奈何で堪え得べき

繼母 幾度か
 止めまじゝが ゆくりなく
 仰せに從ひ まゐらせて
 東都の旅に 立ち出でき。

幼き時ゆ 親と親
 妾の「夫」と 定めたる
 いとしの君の 叔父おはす
 み許をこそは 尋ねつゝ。

今なほ眼に 別れし 繼母の姿
 あはれ身も 立ち添ひて
 妾は泣きて 倒れしよ。

名残は盡きぬ 程にしも
 いと疾く駈せて 家郷の
 野も家もさかり 山かすみ
 前方は遠し 雲の空』

濃こきむらさきの(八)夜よるの衣きぬ
 沖おきの方かたより垂たれ初はじめて
 漸したいにやんら黒くろみゆき
 怨うらみは深ふかし海うみの面おも。
 時ときしも二人たりは起たち上あがり
 垂つなれ勝かちに伴つれ立たちて
 すゝる歩あゆみに清きよ河かはの
 暫しばしの宿やどに歸かへりけり。

第三章
孤燈の卷

軒のき端はに通かよふ(一) 濤なみの音ね
 常つねには非あらず ずさまじく

孤燈の光 簿くして
寂しき哉や 家の内

二人は互に 悄れつゝ
少時静焉を 守らひて
垂首れ居しが 坐を進め
彼女再び 語るらく。

「やうく 東の 街につき
所在をやすく 尋ねえて

安息の胸を 撫る時
繼母より電報 來りける。

如何なる事の 有らばとて
歸りなましそと 有りければ
妾訝り居たりしに
翌る夕ぐれ 父ぞ來ぬ。

父は優しく 歸り來ね
余こそ今は 悔みにけれ

四人が共に家出して
人に會さん顔もなし。

いざ伴れ立ちて歸らなん

さらば！と手を把り告げしかど

繼母の電報を想ひつゝ

只管否みて諾はず。

あたりの人も歸るべう

勧誘めましゝが胸のまゝ

仰せに反きおたりしに
父は怒りて歸りけり。

後にて繼母の書簡見れば

言葉に絶えし父の胸

君よ聴きませ！あさましや

世にも無情き父の胸。

自身が心を満たすべき
藝者迎ふる代金得んと

此の身を儂なく豊裕かなる
人に賣らんの謀みよ。」

玄美震へつ手を拱みつ、
彼女の眼もの凄く
濛き光に耀やきて
少時言語ぞ絶え居たる。

(二)

「さて後父は家郷の

家庭に還らて何處とも
行衛あかさずなりにけり、
消へて跡なき夢の如。

三人の生兄も出でしより
もはや七年過ぎにしを
歸り來まさず音信なし、
旅路の露と……消えしにや。

互に浮き世の海の濤

絆^{はたし}やつらく 襲^{おそ}ふとも
此^この日^ひ此^こ處^ちにて 會^あ合^あましと
三年^{さんねん}を固^{かた}く 誓^{ちか}ひしを……』

(三)

「朝^{あさ}な夕^{ゆふ}なに 忍^{しの}ぶれば
身^みはあさましく 憔悴^{せうさい}れゆき
日^ひ々に悲^{かな}しく 沈^{しづ}めるを
またも不幸^{ふこう}の 雲^{くも}寄^よせぬ。」

身^みの行^{ゆく}未^すは 「夫^{あに}」とこそ
頼^{たの}み居^ゐたりし 彼^かの君^{きみ}は
去^こ年^{ねん}の秋^{あき}しも 病^{やまひ}にて
此^この身^みを殘^{のこ}し…… 逝^ゆきましき。

無^つ情^{ぢやう}き撈^{らう}篋^{けつ}も 辛^{から}き火^ひも
厭^{いと}ふ事^{こと}なく 忍^{しの}びしに
信^{よす}頼^か者の君^{きみ}の 逝^ゆきまして
妾^{わらわ}の運^{うん}命^{めい}ぞ 捨^{すて}小^{せう}舟^{ふね}。

彼の君亡くて何あらん
生命の君に別れたる
此の身にあはれ何あらん
妾は待てるよ死の招！』

(四)

爰に詞は途絶えしが
見る眼も情に打ち伏して
咽べる彼女を眺めいり
玄美少時はもの言はず

彼女が辛く語りたる
いと絶えどこの終結の語
玄美の胸に如何ばかり
苦しく鋭く響きけん

(五)

行末かけて「妹春よ」と
深く心中に縫りたる
縁の絶えし處女こそ

死の手を待め
只管に。

品子の感
今にかに！

一度いと
心地よく

此の身の自由を
誘ひて
再び悶ふる
彼女はも……

斯くとばかりは
想ひきや

如何で彼女を
怨みえん、
余こそ無情き
征矢の跡

品子の胸に
刻みたれ。

さはれ
此の身や
彼女をば

忌みしに非ず
燃えまざる

想の焰！
熱かれど
身の運命。

亡嬢操子の
身を慕ひて

あらぬ想を
雲の上
品子をば
駈するが儘に

何^などか苦^{くる}しめ 能^{あた}ふやは。

さなり 冷^{つめ}たき 墓^ぼの下^{した}

永^ね眼^まれる 亡^き嬢^みの 身^みは慕^おはね
臨^{いま}終^はの 牀^{とこ}の 血^ちの 文^{もん}字^じ
聖^{きよ}く け 高^{たか}き 胸^{むね}の 跡^{あと}！

『品^{しな}子^こ』の上^{うへ}を 想^{おも}ひやり

語^{かた}ら ず 言^いは ず 黙^{もく}しつゝ
逝^ゆき に し 嬢^{きみ}ぞ 愛^{あい}の 神^{かみ}

… 想^{おも}へば 亂^{みだ}るゝ 余^わが 心^{こころ}……

互^{かたみ}に 戀^こひつゝ 戀^こはれつゝ

希^{のぞ}望^みの 影^{かげ}に 照^てら され て

窃^{ひた}か に 行^{ゆく}末^{すへ} 頼^{たの}め り し

品^{しな}子^こな が ら も 如^い何^かな れ ば……

さなりよ さなり！ 如^い何^かな れ ば

家^か庭^{てい}を つく り 得^うべ き や は！
まいて 『運^{うん}命^{めい}を 捧^{たも}げし』の

墓はかのみ前まへの「神誓ちかひ」あり。

しかく 玄美ひろみは 回想おぼひての

闇やみの浮うき橋はし 辿たどる時とき

凄うれくぞ 吼はえぬ 濤なみの聲こゑ

譬たとへは 神判さばの 喇叭ラッパの音ね

想おもはず 玄美ひろみの 膝ひざの上うへ

秋あき子こ震ふるへて 打うち伏ふしつ、

孤燈ことうの光ひかり 薄うすくして

寂さびしき哉かなや 家いえの内うち。

第四章

斷腸の巻

(一)

岩間いばの百合ゆかりの 花散はなちりて

波なみにも深ふかし
何い時つしか悄あはれにし
名な残ごりや榮えし
萩はぎの花
秋あきの影
亂みだれゆき

暑あつさ避けんの
海あ水へ浴ぎの聲にの
昨きの日ふの空の聲にの
浦うら曲わ寂さびたり
移うつらひて
富とみの浦
人ひと々の
満みたされし

都みやこの人の
唯ただ一ひと人

影かげをも止とめぬ
玄ひろ美みは孤身ひとり
汀みぎはを尚ほも
浦うら枯がれの浦にして
道みち遙よひき

眺ながめ有情じやうの
風かぜあびながら
玉たま章あきらは品子こゆ送り來し
小こ包づみ受うけ取とりぬ
北きたの椽
佇たぐめる

(二)

針はりに運はこびし
 彼かの女ぢよが愛あいと
 開ひらて出いでし
 看みよ小包こづみの
 毛けの襦じゆ中ちゆうゆ
 毛けの襦じゆ衣ぎ！
 涙なみだとを
 針はりに運はこびし
 毛けの襦じゆ衣ぎ！

病びやうの牀とこに
 玄ひろ美みの肌はだを
 小ちひさき胸みねに湧わきかへる
 血ち潮しほを
 見みずや編あみ跡あとに
 病びやうの牀とこに
 撮い養こひ伏ふす
 想おもふ身みの
 湧わきかへる
 編あみ跡あとに

吹ふく浦うら風かぜに
 曝さらさせじとて
 朝あさな夕ゆふな
 胸こ裡ちを
 見みずや編あみ跡あとに
 肌はだをば
 優やさしくも
 編あみ跡あとに

(三)

書よ簡かんを開ひらけば
 あゝ慕したはしさ
 恋こひしさ
 堪たへぬ想おもひを
 語かたるらん
 文も字じさへ跟しどろ躑ちゆうに
 亂みだれたる

さこそ秘むれど胸の琴
戀の曲に高鳴りて
孱弱き矯手で支へかね
漏れて響くか書簡の文字

固く秘むれど支ふれど
小血管もえて湧きかへる
熱き血汐の流れしも
溢れて匂ふか書簡の文字

(四)

初の程は文字清く
曾て學園に在りし頃
友垣たちの美みし
影跡も残りて美しくしや。

さはれ「父母兄弟の
眼をし避けつゝ編みけるよ
み肌に添へて給はらば

妾は和がんの
亂れはも。

(五)

断れては續き續きては

いたくも長し紙の尋

頃日彼女が唯だ獨

悶えに惱む胸の跡!

病の経過氣遣し

その身の決心崩れては

彼の寫眞を眺めつゝ
忍ぶねいたく難き由

互に辿りし川堤

現象追ひて遙々と

憧れ迷ひ水の面を

影を映せし光景を

あるは嫁ぎし友垣の

招きの玉章多き由

心許せし ざる友の
永劫の眠に 落ちし悔。

昨今しも 縁談
繁々に起れる 悶え言、
（仄かに）その身の 晩年まで
獨身生活 願ふなど。

(六)

さて讀みゆけば 終には

親鳥失せし 野の雉
暴き野分に 羽はやれて
草葉に潜む 悲し身の

夫れにも勝る 苦痛に
日毎を忍ぶ 籠の鳥
悶えや 息も 絶えど
あゝ亂るゝよ 魂の緒

信賴の光明 消え果てゝ

評判の聲を聞きつれば。――
 あゝ悪口性き郷人の
 暴き濤風厭はねど
 玄美の君は學博く
 才智や賢しく在す身よ
 鄙の伏屋の煤れ鶏
 いかで心に適ふべき。
 さても榮光なき
 梟の

浮ぶ術なき
 毀れ舟
 秘むるに難き
 無情さよ。……
 深くも閉ぢし
 胸なれど……
 御身に如何で
 聞えんと
 憂き身に風は
 辛くとも
 荒濤寄する
 海の岸
 方角も知らず
 通ふ如
 魂はさまよふ
 闇の路

その身の程も
顧みて
鶴を慕ふに
似たる哉
愚かと言ふも
烏澁の沙汰

さればよ
竟に不圖も
縁の緒を
断たれたれ
斯くこそ
甲なる人は云へ
乙なるものの
聞ゆるは

玄美の君の
如何ばかり

學びの道に
賢しとて
愛情の道の
審判には
あゝ人ならぬ
畜生かな

若き心に
前後も
想ふひまさへ
非ずして
好色しき女子の
手に―などと
聞くだに胸の
潰るゝよ

まして
妾の
父母は

悲しき窓の頃日
いとしめやかに
御身を無情き者
とこそ

御身を無情き者
とこそ
誹謗りまして
片時も
絶え間なく
他家へ嫁げ！と
宣はす！

穴あらばとぞ
想へども

此の身の爲に
君にさへ
忌はしの雲
懸くらんを……
想へば堪ふるに
難き哉。

(七)

玄美 玉章 打ち眺め
森と抱きて 在りけるが
西のみ空を 仰ふぎつゝ
裂きぬ！ 破りぬ！
百千に。

「唯一の親友」と記しけり。
も 一のしたりしが宛名には
渠 突爾に筆とりて
さては何をか想ひけん

終へてあたりの調度をば
もの狂はしく整理へつ、
看よ 蒼褪めし額の色
決心の 句へるを。

(八)
斯くて玄美は黙しつゝ
名残の浦を後にして
回想の深き故國にけり。
孤身飄々 歸りけり。

(下)

第五章
草廬の巻

(一)

燃ゆるが如き 夏の彩
漸次 黄染に 褪せゆきて
下界 いつしか 静やかに
神秘の幕に 鎖まれぬ。

「よろこび」
歡喜調ぶる
風の聲

「たのしみ」
快樂奏づる 水の韻
今しも 悲哀の音と移り
あゝ寂たりや 秋の空。

(二)

「みたま」
靈の嬢に 捧ぐべき
詩ものさずば 歸らじと
決めて 都に 登りける
玄美 何にか 感ぎけん。

操子此世を死し去りしより
 乳母はいたく嘆なげきつゝ
 瑩城の山麓やましかに草くさの廬いは
 建たびき小この草くさの廬いは
 此處より日毎ひごと眞ま心こころゆ
 溢あふる露つゆの花はな繁しげき
 草花を携たづへ詣まよでては
 亡な嬢ぢやうのみ墓はかに手た向むけり。

(三)

攝養の浦うらを後あとにして
 東都みやこの友ともも訪おもはず
 はた家郷やかとに立たち寄よらて
 谷たにの市いちにぞ歸かへり來きぬ
 曾かつて五年ごねん住すみ慣なれし
 涙なみだの郷さとに亡なき嬢ぢやうの
 乳母めのと住すまへる草くさ廬いはにぞ
 玄美ひろみはやんら歸かへり來きぬ

乳母はいとど喜びつ、
 さはれ 玄美の來りしを
 語る事なく 秘めたりき、
 渠が願に任せつゝ。
 玄美は 眺めぬ 窓に倚り
 亡嬢は 永眠れる 丘の頂、
 花の蔭にて 語らひし

(四)

庭園を 抱ける 丘の麓。
 さては 戀を 覺り得て
 無心の詩に 手を引きし
 いさゝ流の 岸の上
 立てる柳の 枝の景。

(五)

二人は 笑みつ 語らひつ
 咽びつ 泣きつ 黙しつゝ

互かたみに袖そでを 搾しぼりあひ
覺おぼえず時ときを 移うつしける。

今いまし 玄美ひろみが 立たち起あり
別わか離れの 辭ことば 告つぐる時とき
乳母めのとは袖そでに 縫ぬりてぞ
涙なみだながらに 語かたるらく。

『もはや 何をか 聞きゆべき、
さはれ 迫せめては 亡なき嬢まが

草葉くさばの 蔭かげゆ みそなはし
喜よろこびまさん 事ことをだに。

産うまれまししたる 其時そのときゆ
養育ばいく仕つかへ まゐらせし
此この身みにさへも 告つげまささず
秘ひめて在あらしゝ み心こころや。

あゝ如何いかなりし！ み心こころや、
想おもひ出いでゝは 朝あさな夕ゆふ

濡れにぞ濡るゝ袖しきて
御身をこそは待ち居たれ。

さるを御身が洋と洋
遠く隔つる外国に
渡りましなば此の身こそ
何にをか待ちて生存へん』。

(六)

語りも終へず泣き伏しゝ

乳母に別れ出でて往く
玄美の眼には新らしき
泉と湧きぬ紅の露。

第六章

墓前の巻

手^た逝^ゆ玄^{ひろ}
向^むき美^み
に^には
立^たし
て^て嬢^{きみ}
る^るがの

人^{ひと}墓^{はか}中^{なか}
の^のに
姿^{さま}前^{まへ}し
て

(三)

黙^も幽^し神^{しん}い
す^す肅^{じま}秘^ひと
よ^よの^の寂^{さび}
重^{おも}木^こ門^{かど}寥^{しみ}
く^く影^{かげ}の^の

ほ屏^と森^{もり}
森^{もり}の^のや^や中^{ちゆう}
の^の暗^{くら}固^{かた}
精^{せい}く^く

天^{てん}野^のや^や黄^こ
地^ち川^{かは}ん^ん金^{かね}
に^にの^のら^ら色^{いろ}
迫^{せま}響^{ひび}裾^{すそ}な^な
る^るゆ^ゆより^{より}す
暗^{あや}る^る雲^{くも}
の^のみ^み褪^あの^の袖^{そで}
影^{かげ}つ^つせ^せゆ^ゆきて^{きて}

寂^{さび}裸^{はだか}翅^{つばさ}落^{おち}
寞^{しみ}々^々破^や葉^は
深^{ふか}の^の積^{つみ}
し^し梢^{こずえ}に^にれる^{れる}
空^{そら}伯^{はく}蝶^{てつ}蛙^{あせ}
の^の勞^{らう}永^ねの^の上^{うへ}
色^{いろ}な^な眠^ひり^り
きて^{きて}

(一)

地獄の空の丸木橋	焔！呪咀の火と燃ゆる	苦痛の呵責に吐く息の	牛に似たる風情哉	譬へば屠所に追はれゆく	潜るに辛き身姿	進むに重き足の態	嬢が永眠りし螢の門
----------	------------	------------	----------	-------------	---------	----------	-----------

怨みの手をば握りしめ	煩悶の草根を抜きがての	根ざし深くぞ繁りたる	進み寄りけり	隠るひ亡せし	山麓遠く木の蔭に	いつしか人の歸り去り	眺めて暫時佇みつ。
------------	-------------	------------	--------	--------	----------	------------	-----------

黒血 觸髅 積りて
 流れて
 川をなす
 山をなし
 終りて
 想ひを
 惱むを
 悶えを
 諭す
 慰めか
 悲みか
 憎みか
 誘ひか
 破る
 傷む
 諭す
 慰めか
 悲みか
 憎みか
 誘ひか
 有情の胸に
 誘ふや強き
 鐘の聲を
 悲哀を

辿るに似たる
 憂あり。

(三)

玄美が
 胸部を
 抱きつゝ
 やんら
 ほ暗き
 墓碑の
 面を眺めて
 垂首れし
 暮の鐘
 折しも響きぬ
 韻は遠く
 細かれど
 天に沈黙を
 地に闇を

奈落の底の
夕暮の
鐘の音か。

怨憤の刃抱きつゝ
牙齒を噛みて毒氣を吐く
悪魔に似たる雲迷ふ
空の彼方に響きゆく。

(四)

古き卒塔婆の
繁き中

無心の額の墳墓を
抱きて立てる松が枝に
怨示すか苔の色。

彼の日の詣での紀念にと
二本三本の座石の邊に
渠が手植ゑし莖草
今は花なく枯れ果てぬ。

(五)

涙なみだは 澗かれず 語ことは 盡つきず
 さは 此この世よの 余わが 身みには
 六む度たび 移うつりぬ 花はな 紅もみぢ葉ぢより
 嬢まが 永ね眠むに 落おちし 更さらに
 死しせるが如ごとき 面おもにして
 手てを 拱こまぬき 眺ながめ 入いり
 碑いしの 面おもを 眺ながめ 入いり
 も 狂くるは しく 叫さけぶら ぐ
 (六)

渠かれは 湧わか 静しづか 永と劫はに 冷つめた 風かぜに 悲かなし 山やまの 裾すそより 雲くもに 淋さびし 西にしの 空そらより
 倒たよれぬ 限けんの し 韻ひびき 湧わき 出いる
 墓はかの 前まへ 怨うらみ 渠かれの 胸むね 碑いしの 面おも 調しらべ 吹ふき 來きたる 有あり
 渠かれは 湧わか 静しづか 永と劫はに 冷つめた 風かぜに 悲かなし 山やまの 裾すそより 雲くもに 淋さびし 西にしの 空そらより
 倒たよれぬ 限けんの し 韻ひびき 湧わき 出いる
 墓はかの 前まへ 怨うらみ 渠かれの 胸むね 碑いしの 面おも 調しらべ 吹ふき 來きたる 有あり

胸に懐きて逝きし嬢
 悶えの病牀の
 語らふ友も有らなく
 覺らぬ余を慕ひつゝ
 御身の運命 譬ふれば
 深山の奥の 人もなき
 淋しき廬の 庭の邊の
 咲かずに散りし 薔薇の花

「無邪氣ことを語り合ひ
 同じすさびに 手を把りし
 彼の夕 何どか 其戀想
 告げまさざりし? あはれ亡嬢!
 裂けんの胸を 懐きつゝ
 獨悲しき窓に 寄り
 如何に眺めし? 蹟なき

(七)

大空おほそら 冴さゆる 月つきの影かげ。

少時しばしを辛からく 微睡まどろみて

曙あけの空そらに 女男めをとこの星ほし

嬢さかみが想おもひや 如何いかなりし？

嬢さかみが想おもひや 如何いかなりし？

あゝその悶もたえの 朝夕あさゆふを

回想おもふにつけて 湧わきかへる

血潮ちしほは疾とくも 溢あふれゆき

あゝその悶もたえの 朝夕あさゆふを

余われは捧さかげき 身みの運命さだめ』

(八)

「朦朧おぼろ月夜づくよの 花陰はなかげに

生兄あになき事こと状じやうを 悲かなしみて

語かたり給たまひし 彼かの詞ことば

後日ちのちにぞ意味こころ 覺さとりける。

想おもへば さなり 何なにとなく

差ははしげに 低頭ひなれて

差ははしげに 低頭ひなれて

「妾の兄に なりてよ」と
頬に紅くれなる サト赤あかく。

さはれ 悲かなしも 余わが胸むねや
「敬愛」の念もひに 鎖とぎされて
熱あつく 漲みなぎる み愛なさけ情けも
亡なき嬢みよ 汲くむには 淺あさかりき。

されど！ 御身おんみが 乳母めのとより
遺送おくりまししたる 玉章たまづさよ、

戀おもひの 涙なみだ 跡あとしるき
臨終いまはの 牀とこの 血ちの 文字もんじ！

想おもはず 犇ひしと 抱いだきしめ
いと 疾とく み許もとに 馳はせけれど
亡なき嬢みの 眠ねむりや 永劫とこにして
現世このよの 嬢きみに 非あらざりき。

まいて 周あたり圍りに 人ひと多おほく
抱たき 起おこさん と 寄よりし身みは

退けられて 儚なくも
眺めたりしよ 柩の面！

(九)

「墓前に詣て 身をなげて

叫けべど 亡嬢は 應なく

呼べども 亡嬢は 答なく

謝せど 誓へど 亡嬢いはず。

あゝ世の風を 外にして

永劫に冷たき 碑の下
永眠に安すき 園の中
今はた 亡嬢よ 羨まし。

永眠れる 亡嬢よ 亡き嬢よ
涙の窓に 日は暮れて
悶の谿に 迷ふ身の中
知らずや 熱き 胸の中

いさゝ流の 岸にして

靈しく 優しき 青柳
それかの如に 立添ひて
余が前さらぬ 嬢が姿

葡萄の柵の下にして
とも に 調べし 洋琴
その音の如に 高鳴りて
余が耳さらぬ 嬢が聲

されど 瘦せたる 手を伸べて

抱かんとすれば 影あらず
聴かんとすれば 聲あらず
裂けんの胸を 亡嬢しるや

(十)

「あゝ夕雲の 翔けりゆく
空の彼方ぞ 懐かしや
涙の世をば 外にし
乗らんか 雲の 翅の上

其處には「歡喜」「快樂」の
 笑は久遠に清くして
 神秘の扉ひらくべき
 妙なる鍵の有りとかや。
 さらば永眠れる亡嬢の夢
 破醒りて共に胸の中
 語らふあしたの歡喜に
 叫ばん曙のありやせん』

「遠き昔も現今の世も
 自由の翅有りながら
 自由の翅伸びざるは
 これ人生の掟とや。
 澄みつ潤みつ濁らみつ
 散りつ亂れつ砕けつ
 結びつ間なき水泡に
 あゝ似たる哉戀の靈」

(十一)

「いざや此身ぞ一葉舟
 太洋の暴風にまかせつゝ
 浮きつ沈みつ外國の
 詩の港に漂はん。」

巨濤荒れて雨そゝぎ
 巖ぞ叫ぶ暴の夕
 廣きみ空の雲の上
 謠ひて和しね嬢が歌

(十二)

共に語りし
 余覺らずて
 燃ゆる戀の
 覺りし今日や
 彼嬢の泣き
 胸の中はず。

深き怨を嬢捨てゝ
 永眠の園に逝きし時
 此世に迷ふに
 余が胸に出でつゝ
 無限の悶え湧き出でつゝ

散^ち枯^{かれ}折^{をり} 共^{とも}立^た注^そ列^{つら} 天^{てん}
 り葉^はふし 無^むに^にて^てぎ^ぎなる 地^ちを^を籠^こめ^め
 ぬの梢^{こすえ}心^{しん}の 塔^と婆^はの 墳^ぶ墓^ぼ ぬ
 碎^{くだ}風^{かぜ}の 面^{おも}わ 影^{かげ}く^くらく
 け襲^{おそ}ひ 来^きて 草^{くさ}の 露^{つゆ}
 一^{ひと}そよぎ

頼^{たの}優^{やさ}胸^{むね}船^{ふね} 夕^{ゆふ}極^{ほと}あ 戸^と落^お巨^{おほ}
 むしき^{しき}に^に湧^わに^に寄^よせ^せ べの^{べの}閨^{ねむ}の^の 極^{ほと}に^に 空^{ぞら}ゆ
 はひとり^{ひとり}に^に来^くる^る 戸^とを^を開^あけ^けて 落^おつ^つる^る なく
 荒^{あら}濤^{なみ}を^を 嬢^{きみ}が^が歌^{うた}！
 回^{おも}想^ひを^を 和^{やわ}げ^げね^ね！
 (十三)

草くさ時とき 木きしも 無む心しんの空そらや 額ぬかにして幽お漠ぎろなく
 撞つとぞ 双もう手て伸のばして 己おのが胸むね。
 昇のぼり往ゆく方かたを 仰あやぎつゝ 環わを形かたち爲なり
 悠ゆるくかほそく 烟けむの環たま
 碑いしのまへに 燒やきけるが
 烟けむぞ昇のぼりぬ 瑩はかの空そら。

抱いた渠かれ 突うち爾つひに 身みを起おこし
 居ゐたりし 白しろ包づみ
 空そらに昇のぼるか 此この夕ゆふ。
 臨いま終はの叫さけび 練くりかへし
 亡な嬢みが衣ころもを 永ねい眠むりたる
 白はく衣い纏まとひて 墨すみ染ぞめに
 知しらず 脱ぬけゆく 誰たが魂たまか

(十四)

斷腸大尾

吾が日の本の國の内
 その後玄美を見たる由
 傳ふる者も非ずして
 消えて跡なし
 渠の影

(後編終)

吹き來る風の冷やけく
 いとど冴えたり
 天の星

*

*

*

*

*

*

斯くて何時しか時移り
 冬さり春の花散りて
 再度秋となりしが
 玄美の姿！
 今何處

明治三十九年九月十五日印刷
明治三十九年九月十八日發行

實價金六十錢

著作權所有

東京市神田區和泉町一番地五號地

著者 入江雅次郎

東京市神田區錦町一丁目十六番地

發行者 大月隆

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目

十二番地 青木弘

印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目

十二番地 株式會社秀英舍第一工場

印刷所 東京市神田區錦町一丁目十六番地

發兌元

文學同志會

大阪市江戶堀上通

廣島市西橫町

（電話本局千〇九十三番）

文學同志會大阪支部

文學同志會廣島支部

●●●文學同志會出版圖書目錄●●●

美	妙	人生の氣力	人生の初旅	人生の老旅	人生の悔悟	人生の片影	人生の目的	人生經濟學
定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅
二十錢	四十錢	三十錢	六十錢	二十錢	四十錢	二十錢	廿五錢	四十錢
人生の情事	吾人の生活	山高水長	風月萬象	斷巖絕壁	枕頭の山水	悲哀の快觀	萬情萬眉	
定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	
二十錢	四十錢	廿五錢	四十錢	三十錢	四十錢	三十錢	十六錢	

聖僧道元	禪學斷片	活禪錄	活精神	活學談	虛心談	精神と力量	斬奸狀	最近國家社會主義
定價四十二錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價五十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價四十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價六十錢 郵稅八錢
青年の將來	研學の順序	立身の事蹟	高等艷麗文集	吞氣文集	戲曲妙文集	滑稽妙文集	馬琴妙文集	目佛教拾二傑傳論
定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價卅五錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢

女子講本	婦人實務錄	深窓の佳人	頓才の詩人	偉人の生長時代	偉人の膽力	高等記事論說文	山水記事論說文	作文指南
定價三十錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿二錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅六錢
理想の大臣	珍嶋長明海道記	小哲學	天籟萬丈	成功秘訣到着	失策の半生涯	墳墓の地	戀と死	活戀
定價廿五錢 郵稅四錢	定價十五錢 郵稅二錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價卅五錢 郵稅八錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢

心學迷悟篇	心學道義篇	心學人間篇	心學道體篇	心學養性篇	學生の苦心	詩の神	心識活談	英雄の片影
定價四十二錢	定價四十二錢	定價四十二錢	定價四十二錢	定價四十二錢	定價四十二錢	定價四十二錢	定價四十五錢	定價四十二錢
心學性理篇	心學明德篇	心學靈性篇	俳流の女神	箴言	高等秀才文集	奇僧の片影	高等才媛文集	風彩と審美學
定價四十二錢	定價四十二錢	定價四十二錢	定價四十二錢	定價四十二錢	定價四十二錢	定價四十二錢	定價四十二錢	定價四十二錢

無能の天下	人情的後見	戀愛の精神	理想の政黨	軍隊の側面	成効者の苦學	加賀の千代	哲學要領	禪學の奧義
定價十五錢	定價二十錢	定價三十錢	定價四十錢	定價二十錢	定價二十錢	定價二十錢	定價五十錢	定價五十錢
弱者の臨終	戀愛の文豪	婦人の情力	自然界の審美	文學の審美	人生の審美	吾家の憲法	社會學と哲學	社會學講義
定價三十錢	定價三十錢	定價三十錢	定價四十五錢	定價四十五錢	定價四十五錢	定價四十五錢	定價六十錢	定價六十錢

近松妙文集	美文組立法	中等作文組立法	秀才記事論說文	馬琴旅行文集	心琴	女子美文斷片	高等美文斷片	審美學要義
定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅六錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢
軍歌集	軍人と膽力	社會學と事業	社會學問答	名流の家憲	立身冒險談	芭蕉妙文集	爲永妙文集	西鶴妙文集
定價十二錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價七十五錢 郵稅十錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價卅五錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	發賣禁止

六

處世の歌	征露詩集	小學高等科 字引一學年用	全 二學年用	全 三學年用	全 四學年用	中等國語讀本 字引一學年用	全 二學年用	全 三學年用
定價三錢五厘 郵稅二錢	定價十五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價十五錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢
全 四學年用	全 五學年用	高等美文資料	殘花集	玉琴集	すみれ集	百字文集	忍ぶ草集	人生と山水
定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢

七

テニソンの詩	琵琶歌妙文集	謠曲妙文集	婦人の美觀	婦人と家庭	婦人の使命	婦人と文學	英雄僧日蓮	新婚旅行
定價六十錢 郵稅八錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價五十錢 郵稅六錢
不如歸集	靜思斷片	殘雪集	繪端書使用法	百字文の榮	漬物	淑女妙文集	東京遊學案内	女子遊學案内
定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價十二錢 郵稅二錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價十五錢 郵稅二錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價四十錢 郵稅六錢